## 『西南学院アーカイヴズ』第1号 《目 次》

■ 巻頭 言 ■					
新たな百年の歴史を刻む	今	井	尚	生…	1
<ul><li>■ 座 談 会 ■</li><li>『西南学院アーカイヴズ』の発刊に向けて</li></ul>			•••••		3
■ 寄稿 ■					
バプテスト資料室開設にあたって 一資料を古紙に、資料室を倉庫にしない一	金	丸	英	子…	15
西南学院初代院長條猪之彦の事蹟	安	部	健	<b>···</b>	23
日本における学生会館の生い立ちと 西南会館建設について	大	杉	晋	介…	51
百道浜校地移転 20 年 〜変わったこと、変わらないこと〜	西		輝	久…	67
西南学院グリークラブの百年	河	野	正	海…	77
<ul><li>■ 資料</li><li>■ 執筆者紹介</li><li>無 集 後 記</li></ul>					85
西南学院初代院長條猪之彦の事蹟 日本における学生会館の生い立ちと 西南会館建設について 百道浜校地移転 20 年 ~変わったこと、変わらないこと~ 西南学院グリークラブの百年  資料  ■ 資料	安 大 西河	部杉野	健 晋 輝 正	介… 久…	2; 5; 6' 7'

## 新たな百年の歴史を刻む

今井 尚生

歴史をもちつつ歴史の中に生きている、それが人間である。言うまでもないが、この場合の歴史とは、単なる物事の時間的な前後関係を意味するものではない。歴史的なあり方とは、過去を踏まえ、将来へと歩みを進めるものとして現在的生を意識し、 形成することを意味する。「どこから来て、どこへ行くのか」という問いと共に己を省みるとき、人は自らが歴史的であることを意識する。そして、一人の人間ばかりでなく、人の作る共同体もまた歴史的な存在である。

2019年3月、西南学院の創立百周年を記念する諸事業の集大成として『西南学院百年史』(以下『百年史』)が刊行された。西南学院に関わるものが、歴史的存在としての自覚をもち、学院の精神を継承しようとする営みの結晶である。この『百年史』の完成は、人々に次の百年を意識させる契機となった。建学の精神を涵養し、歴史への理解とその継承を図ることを設立の目的とする西南学院史資料センターは、次なる百年の歴史が紡がれて行く軌跡を記録する作業の一環として、この『西南学院アーカイヴズ』の刊行を企画した。

名称に「紀要」ではなく、「アーカイヴズ」なる語を用いたのは、学問的歴史研究だけでなく、口述に基づく記録を資料として含めることを是としたためである。「紀要」とは、研究機関が刊行する研究論文集のことである。将来の歴史記述のための資料を残すには、客観的な根拠と学問的な手法に基づいた研究が必要不可欠であることは言うまでもない。その大切さを示すエピソードとして、『百年史』編纂の作業メンバーが、西南学院の校歌誕生の年に関する検証過程で明らかにしたことを紹介したい(詳細は『西南学院史資料センター紀要』p.28)。『西南学院七十年史』には、校歌を作詞した水町義夫の追想を基に、1921 年 3 月 10 日の第 1 回中学部卒業式で校歌が披露された

と記述されている。ところが、1922年の第2回の中学部卒業式および高等学部入学式の式次第には「校歌斉唱」の記載が見られるものの、前年1921年の卒業式次第や新聞記事には校歌斉唱を裏付ける記載がない。また、校歌の作曲を上野音楽学校教授島崎赤太郎に依頼したのは、同校の学生であった不破ひさ子である。もし不破が島崎教授と面識を得たのが、彼女が上野音楽学校に入学した1921年4月以降であるとするならば、先の式次第のことも考え合わせると、西南の校歌誕生は1921年3月より後であった可能性が高い、と結論付けられるという。

このように、将来の歴史記述のための資料を残すには、一方で客観的な根拠と学問的な手法に基づいた研究が必要であるが、他方で学問的な手法による研究論文に限ると、執筆者は限定され、また執筆にも時間を要し、その間に大切な証言が失われかねない。人の記憶に基づく証言であって、客観性が証明されないことでも、価値あるものは存在する。また当該記述に関する一次資料は将来の発掘を待たねばならないものや、そもそも客観的な一次資料はなく、口述によるものしか存在しないこともあるだろう。

重要なのは、客観的根拠に基づくものとそうでないものとの違いを明確にした記述を心掛けることである。『西南学院アーカイヴズ』は、学問的論文のみならず、広く記録にとどめるべきものも資料として含めることとした。そして、そのことを意識するためにも、名称には「紀要」ではなく、「アーカイヴズ」を用いた。客観的根拠の薄い記述の学問的検証は今後の歴史研究に委ねられることになるが、後世の人々が、その検証の作業を通して、歴史の中に生きた学院関係者の息吹と、建学の精神がさらに継承されていくことを願って、『西南学院アーカイヴズ』を発刊する次第である。

## 『西南学院アーカイヴズ』発刊に向けて

出席者 今井 尚生 (院長、大学国際文化学部教授、西南学院史資料センター長)

古田 雅憲 (大学人間科学部教授、大学図書館長)

西 輝久 (中学校・高等学校副校長)

平良 晃洋 (小学校教諭)

森 万喜子 (舞鶴幼稚園教諭)

土田 珠紀 (早緑子供の園副園長)

司 会 金丸 英子 (大学神学部教授、アーカイヴズ編集委員長)



司会(金丸)▶本日は、新しく発刊される 『西南学院アーカイヴズ』の企画で、 「『西南学院アーカイヴズ』発刊に向 けて」というテーマで座談会を行い、 学院史資料センター運営委員の皆さん の自由な忌憚のないご意見をお聞かせ 願いたいと思っています。もともと 2017年まで『西南学院史紀要』が発行 されており、『西南学院百年史』編纂の ための資料収集や調査研究という役割 を担ってきました。しかし『百年史』 が完成したことにより、その役割を終 えましたが、引き続きそのような刊行物が必要ではないかということで、この『西南学院アーカイヴズ』につながりました。ですから『アーカイヴズ』は、『紀要』の後継刊行物という性格とともに、内規にあるように「西南学院の歴史及び学院関係者の事績を調査し、公表するとともに、将来の年史に向けて積み重ねを行う」ことを目的としていますが、皆さんから『アーカイヴズ』への期待や提言など自由に語っていただこうと思っています。まずはじめに、皆さんの職務の概要などの簡単な自己紹介をお願いします。

土田▶早緑子供の園で副園長をしており ます土田です。私は西南学院大学の児 童教育学科を卒業して早緑に就職した のですが、その年がちょうど西南学院 の創立70周年の年だったんですね。 当時は学院の歴史についてもよく知ら ず、日々の保育で精一杯だったように 覚えています。長く勤めさせていただ き、今は、園の中では私が最年長なの で、子どもたちに早緑の昔話をする機 会があり、毎回改めて、歴史を振り返 ることの意味について、とても大事な ことだなとつくづく感じています。早 緑の昔話は、園の創立記念日に1940 年代の古い園舎の写真などを子どもた ちに見せながら、戦時中に戦災孤児を 引き取ったというところから始まりま

す。そこで育った子どもたちや、食べ物や物資がない中で心を尽くして保育をされた保育者の方々の日々の話が、ただの昔話や遠い世界のできごとではなく、自分たちにつながる身近なものと感じられるようで、子どもたちはすごくよく聞いてくれます。そして私たちが早緑で勤めるようになった以降も、台風で屋根が飛んだり、大雨で樋井川の水があふれたりしました。そういう中でも、早緑は神様に守られ、西南学院とともに歴史を刻んできたということを、これからも伝えていきたいなと思っています。

森》舞鶴幼稚園の専任教員として3年目の森です。その前にも非常勤講師で働かせていただいていましたし、今は年長児クラスの担任を受け持っています。それから、舞鶴幼稚園は2023年に創立110年を迎えますが、そういう意味で、舞鶴幼稚園の歴史や西南学院の歴史に興味を持っています。

**平良**▶小学校の平良です。今、4年目に なりますが、その前は公立の小学校で



平良 晃洋教諭

8年ほど勤務していました。私はクリスチャンですが、生徒たちに教えられることが多く、6年間で聖書の教えを学んでキリスト教というものに理解を深めていく、そういう姿を感じているところです。

西▶中学校・高等学校の副校長をしてお ります西です。私は、公立高校受験に 失敗して 1980 年に西南学院高等学校 に入学したのが、西南学院との最初の 出会いでした。キリスト教の学校だと は聞いていましたが、チャペルの時間 があり、毎週聖書の言葉を聞く機会が あるんだとカルチャーショックを受け たのを覚えています。その後、卒業し て大学は本学ではなかったんですが、 1988 年に非常勤講師として働き始め て以来30数年経ちました。高校時代 の話に戻りますが、私の場合、少し異 色だったのが、私の父が僧侶だったこ とで、高校の毎日の終礼で聖書を読ん で順番にお祈りするんですが、自分の 中に違和感があって、それを頑なに 「お祈りはできません」と断ったんで すね。その時、担任の先生から、「そ れはしょうがないね」と許していただ きました。そういうふうに当時から生 徒の個性や主張などを大切にしながら 育てていただいたと思います。

古田▶大学人間科学部の古田です。大学 図書館長を6年ほど務めています。ま た学部の講義では日本文学と国語教育 を担当しています。今年で17年目を迎えます。私は毎日学生と接するときに思っていることがあります。それは、たとえ一人ぼっちでいてもしっかりと生きていけるだけの技術と知恵と心の強さと身体をこの時期に作ってほしいということです。また併せて、同じような友人たちが周りにいるという信頼と、また彼らに対する畏敬とコミュニケーションする柔軟性をもってもらいたいと願っています。

**今井**▶学院史資料センター長の今井です。 私が西南学院大学に赴任したのは、



今井 尚生 教授

ちょうど 2000 年で、文学部国際文化 学科(当時)の専任教員としてキリスト教学を担当してきました。大学教育 でいえば、高校までに比べて学生に直 接かかわることが少ないので、学生に とって本当に血となり肉となるような もの、密となる関係をどれだけもてる か。大学よりは中高、中高よりは小学 校の教師の方がおもしろいというのは、 小学校では1人の先生が全部の教科を 教えるから、生徒とかかわる時間が長いんですね。大学では専門の科目を教えるだけですが、専門以外のことを伝えていく、人格教育ということが大事だと思います。私の授業やゼミ、また指導している課外活動など、かかわる時間は短いのですが、それぞれの学生に私が持っている総合的なものを伝えたいと思っています。

#### 自校史教育とキリスト教教育

司会▶自己紹介も兼ねて教育について触れていただきましたが、それでは次に、各学校の自校史教育、あるいは、キリスト教教育の現状はどうなのか、お聞かせ願えればと思います。

土田▶早緑の場合、0歳児から5歳児まで預かっておりますので、3・4・5歳児の幼児クラスの子どもたちには、クラスで週初めに礼拝を守り、聖書や神様のお話をします。もっと幼い0・1・2歳児のクラスでは、例えば0歳の赤ちゃんに神様のことをどのように伝えていくかと考えると、この赤ちゃんをどんなふうに抱き上げるか、どういうまなざしで見るのかという、日々の子どもたちが神様に愛され、守られているという安心感を持ち、自分が大切な存在ということを実感していけるように願っています。そして私たち職員

が、子どもたち一人ひとりを大切に存 在そのものを尊重し、子どもが主体で ある保育を実践する上で、その早緑の 保育理念の根幹にキリスト教があり、 保育の場面一つひとつに結びついてい ることを、私たち自身も実感しながら 保育を進めていきたいと思います。こ のことが、具体的に保育のカリキュラ ムとどのように結びついているのかを 確認していこうと、ここ数年取り組ん でいるところです。小さな子どもたち にどのように神様のことを伝えていく かについては、安心感や自分の大切さ、 神様に愛されている温かな気持ち、見 えないものを信じ、そこに思いを馳せ る心を私たち保育者自身の内に育て確 認し合いながら、日々の遊びや生活の 全ての場面において、子どもたちに伝 えていきたいと思っています。

森▶自校史教育と言えるものはないので すが、2023年に「舞鶴幼稚園創立 110



森 万喜子教諭

周年史」の記念誌を作る予定をしてい て、今は、字が読めなくて分からない 子どもたちもあとから読み返したとき に舞鶴の歴史を知ることになるのだろ うと思っています。またキリスト教保 育ということについて言えば、舞鶴で は、聖句を読んで替美歌を歌い、お祈 りをするという礼拝を毎日行っていま す。毎週月曜日には、神様のお話と献 金をする時間があります。献金につい てもなぜ献金をするのかということを 子どもたちに伝えながら話をしていま す。その他に花の日礼拝や感謝祭礼拝、 クリスマス礼拝など節目節目で礼拝の 意味や感謝することの意味などを話な がら過ごしています。先ほど土田先生 も言われたように、礼拝や聖話の部分 だけじゃなくて、日々の保育がキリス ト教と密接にかかわっているんだなと 思っています。私もクリスチャンです が、私自身が教えられることがありま す。その一つの例として子どもたち同 土で話し合いをしてもらうということ があります。「今日はこれをします」 という保育者からの一方的な押し付け ではなく、「これをしたいんだけどみ んなはどう思う?」「どうしたらいい かな?」と、一人ひとりが自分の気持 ちや意見を話せる場を作っています。 一人ひとりの意見が大切にされること によって、社会性や協調性が身につい ていくんじゃないかと感じています。

**平良** ▶ 自校史教育としては、聖書科の時間のカリキュラムの中で、建学の精神

や設立の経緯などを丁寧に説明されて おり、どの生徒も一度は、西南学院小 学校ができた経緯の話を聞いていると 思います。キリスト教教育の現状では、 毎朝チャペルの時間に聖書科の担当の 先生、教頭、校長が持ち回りで、毎朝 15 分程度、聖書のお話をしてくださっ ています。その時間がすごく大事で、 毎日、平和や人権について考えたり、 友だちや自分のことを学ぶなど、教科 の中では得られないいろいろな気付き をそこで得ているなと感じています。 生徒たちも知識は豊富に持っていて、 きれいな感想などがたくさん出てきま すが、どれだけ行動に結びつくかとい うところは、丁寧に見ないといけない と同僚と話しているところです。

西▶自校史教育については、創立記念日がある5月にチャペルの月間テーマとして西南学院の歴史や創立者 C.K.ドージャーのことなどについて講師の先生に講話をしていただいてます。それから中高で作成した西南学院の歴史に関するパネルを毎年その時期に展示していますが、中学校の1年生に聖書の授業でパネルなどについて学習したことを1枚の紙に「ドージャー・レポート」と呼んで提出させています。生徒たちの個性が出ておもしろいのですが、そんな中で、自然とドージャー先生の足跡や生涯への理解が深まるのではないかと思います。高等学校の方



西 輝久 副校長

では、RKB 毎日放送と西南学院が 1986年に協同で制作した『創立者 C.K. ドージャーの生涯 - 愛と剣と』を見せて、西南学院の歴史について語り合っています。また今はコロナの影響で中断していますが、宗教部が中心となって、西南女学院にあるドージャー先生たちの墓参を 5 月に行い、創立者の歴史を学んでいます。

古田▶私は、1975年に西南学院中学校を卒業しました。現在の博物館の2階で月曜日から土曜日まで、毎日チャペルがありました。中学生の頃は、毎朝聞いた聖書の言葉や賛美歌は、なにやら欺瞞に満ちたもののようにしか聞こえませんでした。ただ、今振り返ると、その場で聞いたり口ずさんだりした言葉たちは、ずっと私の心の内に響いていたのだという気がします。たとえば「起てよ、いざ起て、主の強者」という賛美歌はよく歌った覚えがありますが、就職して教員になり、勤務先もいくつか変わったりするなかでシンドイ

思いをしたときなど、その歌をつい口ずさんで自分を励ましているんですね。そういう自分の思いから自校史教育とは何かと考えてみますと、私にとっては、知らず知らずのうちに身に染まったもので、その価値はあとから何十年もたって、見えてくるものじゃないかと思います。今は、「自校史教育」という卒業要件の科目として試験がありますが、ほんとうは位置づけが違っているんじゃないかと思うんです。そういるんじゃないかと思うんです。そういるとりが真価を問いといます。ものであるような気がしています。

今井▶自校史教育については、キリスト 教学の一環で取り上げていましたが、 最近は「西南学院史」として講義が行 われています。キリスト教教育につい ては、中高や小学校などに比べ、大学 は学生に対して影響力が薄いと思いま すが、キリスト教学が1、2年生の必 修科目となっていて、3、4年生向け にはキリスト教人間学が選択科目とし て用意されています。大学では週3日 チャペルがおこなわれていますが、大 学の中で最大限可能なことを行ってい ます。課外活動では、キリスト教活動 支援課に深いかかわりのあるチャペル クワイアやハンドベルクワイアなどの ほか、聖書輪読会やボランティアグ ループなど幅広く活動しています。



西▶キリスト教教育の現状について申し 上げますと、1996年に中高一貫教育が 始まりましたが、2021年から高校のゼ 口時限が廃止され、ようやく始まりの 時間が中高いっしょになりました。朝 の礼拝が同時に始まるようになり、聖 書を読んで、お祈りをしています。 チャペルの時間は、中高とも週1回あ り、また聖書の授業があるので、週2 回はキリスト教に接する時間を守り続 けています。生徒には、ここで学んだ キリストの香り、西南の香りを持って 卒業させたいと思っているんですけれ ど、3年間の中で、これぞという強烈 な西南の香りというか体験をさせられ るかが鍵になると思います。これを今 後も続けていくためにいろいろな準備 や用意をしなければいけないと思って います。

#### ▋『紀要』の振り返り

司会▶今、自校史教育についてお話がありましたけれども、各校でいろいろ工夫されているなと感じています。さて『西南学院アーカイヴズ』は、『西南学院史紀要』や『西南学院史資料センター紀要』の後継冊子ということですが、『紀要』では、いろいろなテーマや座談会などの企画がありました。それをふまえて『紀要』の振り返りがあればお願いします。

西 ▶ 『紀要』の振り返りというと、創刊 号に「等身大で見る」という寺園喜基 院長(当時)の巻頭言がありましたが、 先入観で見ないことが大事だということに触れています。『百年史』も『紀 要』もそうですが、「きちんと資料を基 にして執筆することが大事で、私たちが思い込んでいるような C.K.ドージャー先生像を廃して見ることが大切

だ」ということを書いておられて、本当にそうだなと感じました。その他に「西南学院と戦争」というテーマや「アサ会事件」の記事など興味深く読ませていただきました。ただ、この『紀要』の浸透度はどうかと考えますと、なかなか学内の方々の眼に触れることが少ないのではないかと思います。『紀要』も貴重な資料としてネットで見ることができるので、多くの人にそのことを知ってもらいたいとページを繰りながら思いました。

**土田** ▶ 『紀要』に伊原幹治先生が書かれた、「戦争責任、戦後責任」の中で、分



土田 珠紀 副園長

かりやすく、「そこに誠実に向き合う」という言葉を使われていました。非常に大事な言葉だと思います。責任という言葉は非常に重く、そして勇気が必要ですが、歴史を振り返り、検証すること、過去と将来に対して責任を持って臨むという西南学院としての強い意志や姿勢をもって、この『アーカイヴズ』が続いていくことに、意義と価値を感じます。

**今井**▶『紀要』の振り返りで言いますと、 聞き取り調査が非常に大事な取り組み だと思いました。実際に経験したこの 人ではないと証言できないというお話 を聞き、積極的に記録することは重要 なことだと思いますし、証言を聞く機 会がだんだんと少なくなっているのが 現状です。『アーカイヴズ』にとって 重要なことは、もちろん学院が出版す るものですからきちんとしたものを出 す必要がありますが、論文のように学 問的に検証するのは負担が大きいし、 学問的に整っていなくてもとにかく 記録をとることが大切じゃないかと思 います。そして「150年史」や「200年 史 | のような年史を作成する時には、 やはり学問的な正確さや評価をする必 要があるのではないかと思います。そ のことは将来の担当者にゆだねるとい う考えもあるでしょうが、今、私たち が出来ることは何かを考えることが課 題でしょう。

### 『アーカイヴズ』 に対する 提言や要望

**司会**▶今、『アーカイヴズ』の話が出ましたので、その新たな役割と内容、『アーカイヴズ』に対する提言や要望、期待などがありましたらお願いします。

**平良**▶『アーカイヴズ』は、どういう人 たちに読んでもらいたいと考えている のですか。 司会▶『西南学院アーカイヴズ』なので、 まず西南学院の関係者、生徒、学生、 理事、教職員などを対象にしています が、卒業生、同窓生などにも読んでも らいたいと思っています。さらには、 同じキリスト教の学校や教会などに配 布したいと思っています。

平良♪なぜそのようなことをお尋ねしたかというと、生徒の父母に対しても教育というか、影響を与えていいのではないかと思ったからです。ここ数年、コロナ禍でチャペルの時間をネットでライブ配信を始めました。すると休んだ生徒だけではなく、「こんな話を毎日聞いているのか」と保護者にも聞かせてほしいという声が上がりました。そういうこともあって、『アーカイヴズ』も内部だけじゃなく、そういった人たちにも届けられるといいと思います。

西▶学校はいつの時代も社会の要請に応えるように強いられますが、これまで神様のみ旨に従ってつないできた先達たちの歴史を見失わないで受け継いでいくことが、私たちの拠り所になるのではないでしょうか。『アーカイヴズ』に期待することについては、そこと重なる気がします。そして、その後の検証や反省は、将来に役立てていくとか、そういう役割を自校史教育は担っていくんだろうと思いますし、『アーカイヴズ』は、後の世の鑑というのでしょ

うか、そういう役割を担ってくれるも のだと信じて期待しています。

古田▶『アーカイヴズ』と聞くと過去の 出来事を取り扱うイメージがあります が、私がぜひお願いしたいことは、現 在進行形のことについてもきちんと記 録して、建学の精神の立場から検証す るような機能を持って欲しいというこ とです。また必要に応じて積極的な意 見を具申するなど、機関誌としての存 在感を明確に打ち出してほしいと思っ ています。例えば、今、大学の体育館 を新築していますが、先年、とある会 議体での議論の中で「学院の姿勢を明 確にするために、LGBTQ+に配慮し たもっと先進的なトイレを設けるべき だ」という意見があったんですね。実 際には、その意見は積極的には取り入 れられず、設計変更はなされなかった んですけれども、ここで大切なことは、 この今日的で大切な課題に関して、今 現在、学内でどのような議論がなされ、 最終的にどのような理由で何がどう なっていったのかという、「いま、こ こ | で生じている「事実 | をきちんと 記録することです。そして、その「事 実 に対して学院史に携わる我々の 「いま、ここ」での見解、問題提起を 『アーカイヴズ』紙上に明らかにでき るようであれば良いと思います。「過 去」を精確に綴ることはもちろん大事 ですが、それと同じくらい「現在」を 記録し、検証しておくことこそが、「未

来」の豊かさに大きくかかわっていく んじゃないかと思います。そういう意 味で『アーカイヴズ』は、何事に対し ても忖度や自己規制や妥協を決して行 わない、言わば「厳しい」雑誌、媒体 であってほしいと思います。

今井▶今、お話がありましたが、現在起こっていることを、今現在、どう評価していくのかということです。今が、将来、歴史になったときに、今と将来では評価の基準が違うかもしれません。30年後、50年後の人たちが読んで、当時はこういう考えだったのか、ということを『アーカイヴズ』に蓄積していければと思います。

古田 ▶ 私は、中途半端はよくないと思っていて、こういう場でもあえて「厳し



古田 雅憲 教授

い媒体であってほしい」というような 強い言葉を使ってしまいますが、それ はきっちり言おうと思っているから なんです。『アーカイヴズ』にもそう あってほしいと思っていますが、もち ろん具体的にはどうするのか、知恵を 出さないといけないと思っています。 森》「厳しい媒体」という言葉を聞いて、 そうあるべきだと思いました。それは、 世間のマイノリティーに対する辛辣な 対応があると思うんですが、そういっ た発言に対しての「厳しさ」で、本当 は公正・公平さだと思うんです。です から「厳しさ」の意味をしっかり理解 した上で、そのような媒体であったら いいと思いました。

西▶今、起こっていることという話がありましたが、時代の流れもあり、高等学校では数年前に職員会議で女子にも制服のリボンをネクタイに変えるとか、スラックスを認めようということになりました。また、コロナ禍の中で、生徒全員にiPadを持たせているんですが、厳しい管理を緩和してはどうかという雰囲気もあります。大変な苦労のあった時代の先人たちの対応に比べれば些末なことかもしれませんが、これも底流に建学の精神があってのことだから、取り上げていくべきものではないかと思いました。

平良▶現在、生徒は経済的に余裕がある 家庭の出身者が多いと思うんですが、 中学受験というプレッシャーの中で生 活している子がすごく多いのが現状で す。これだけ聖書の言葉を聞き、とて も良いチャペルの時間を過ごしたとし ても、それでは賄いきれないほど疲弊 している姿を目の当たりにしています が、数字では測れないものがたくさん あるということに気付いてほしいと 願っています。また、西南学院として 一貫性をもたせることは非常に大事だ と思います。制服問題も中高では進ん でいますが、小学校では慎重になって いて、すぐに進んでいないのが現状で す。西南学院の教育は、一貫性があっ て太い性格のものであってほしいし、 それは生徒も感じるんじゃないでしょ うか。小中高大、どこに行っても西南 は大事にしていることが変わらない、 そういう教育であってほしいと思い ます。

#### 厳しい媒体に

**司会** ▶ それぞれの先生方から、提言や意 見などをいただいて、参考になりまし た。ありがとうございました。皆さん のご意見を聞きながら一番強く感じた のは、アーカイヴズ編集委員会が、現 在の構成員では不十分じゃないかとい う点です。例えば、体育館のトイレの 問題にしても編集委員会ではまったく 知らなかったんですね。現場に近い人 たちが編集委員会に入っていただいて、 意見や提言をしていただくような編集 委員会になるよう努力しなければなら ないと思います。今日の座談会で皆さ んからのご要望をまとめると、これは 大切な取り組みだけど、1つの学校で は難しい。しかし学院全部の知恵と力



司会 金丸 英子教授

を合わせれば何かできるのではないか、 そういう冊子になれないかということ だと思います。また、キリスト教教育 を各校でそれぞれがんばっていらっ しゃるので、それを支えるというか励 ますことができるような内容を載せる ことができないかと思います。そして、 戦時下にあっても建学の精神を求め、 学院や学校を守ろうとした先達たちの 足跡を紹介することも大切なことだと 思いますが、体育館の問題のように、 現在行われていることや時間が経つと 忘れ去られてしまうようなことをきち んと記録し、建学の精神の立場から、 その時の判断、評価を残しておくこと が重要だと思いました。これは編集委 員会への要望だと思って、ありがたく 受け止めさせてもらいたいと思います。 また、『紀要』には様々な記事がありま したが、『アーカイヴズ』もネットで見 られるようデジタル化を進めたいと 思っております。皆さんのご意見を網 羅すると総花的になってしまうのです

が、ご意見の中で「厳しい媒体になる」 ということはいい言葉だと思っていま す。良いことばかりではなく、光と影、 等身大で西南学院の歴史を捉えること は、学院史資料センターだけだと自負

しているので、そのような視点を持っ た『西南学院アーカイヴズ』にしてい ければと思っています。本日は、お忙 しいところお集まりいただき、ありが とうございました。

※この座談会は、2022年10月3日に西南学院百年館2階セミナー室で開催しました。

# バプテスト資料室開設にあたって 一資料を古紙に、資料室を倉庫にしない 一

金丸 英子

学院史資料センター(以下、「資料センター」)では、2023年5月、学院百年館内に「西南学院バプテスト資料室」(以下、「バプテスト資料室」)を開設することになった。本稿では、その経緯を簡潔に記し、バプテスト資料室の使命と目的を述べる。

#### 1. 開設までの経緯

このたびのバプテスト資料室開設は、1976年、当時干隈にあった神学部の「西南学院大学神学部資料室」(以下、「旧バプテスト資料室」)の設置に遡る。当時の学部長中村和夫は、部長印押捺の公文書で以下のように開設目標を説明し、その協力を日本バプテスト連盟の諸教会に訴えた。

神学部に新しい企画が発足致しました。去る7月22日の神学部運営委員会と教授会の決議によって、「資料室(実践神学部門)」の設置が決まりました。(略)教会組織、按手礼、その他の研修や調査に訪れる関係各位に広くお役に立つ「資料室」を作り上げよう(略)なお実践神学部門担当の鍋倉勲講師とこの企画の提唱者吉田晃児牧師(久留米バプテスト教会)のお2人に助言と指導をお願いしております。地方連合、連盟、その他の資料も順次集めますが、まず教会関係のものから始めます。(略)資料を御送付いただければ大変幸甚に存じます。「西南学院大学神学部資料室」が、今後大きく発展する日本バプテスト連盟の諸教会にお役に立ち得るよう、皆様の御支援、御協力を切にお願い申し上げます。

昭和51年8月28日 神学部長 中村 和夫

それによれば、旧バプテスト資料室は「神学部運営委員会」の席上、連盟関係者と 教授会の協議を経て設置が決定された。その目的は神学教育、特に実践神学の教育の ためであったが、設置の発案は神学部教授会よりも連盟関係者の方が積極的であった。よって、資料室の利用対象者も神学部関係者に限定されず、広く「関係者各位」となっており、神学部の授業だけではなく、諸教会の研修やリサーチのためにも開かれることが希望された。運営のための実質的な事務は神学部関係者が担当し、それ以外の指導や助言、サポートは神学部関係者と教会関係者が半々で担うことになった。今でこそ日本バプテスト連盟には「資料保存・管理委員会」が設置され、そのための空間が事務所内に確保されているが、当時はそのような部署がなかったためか、神学部図書部門の働きのひとつとして旧バプテスト資料室が開設され、神学部と連盟の共同運営の運びとなったと思われる。

その後 2001 年 4 月の神学部西新キャンパス移転に伴い、旧バプテスト資料室の運営と目的は大きく変化した。まず、神学部図書部門が大学図書館に統合された。しかし、旧バプテスト資料室の書籍や資料は行き先が定まらず、最終的には書籍類は新たに分類されて大学図書館に所蔵され、その他資料の一部(視聴覚関係を含む)は大学旧図書館の5 階の、人の目に触れることの少ない場所に、それも未整理のまま保管されるに至った。因みに筆者は必要があって何度もそこを訪れているが、人の気配のない「倉庫」のような印象が残っている。諸資料が「行き先を失った」理由は、それらが大学図書館の所蔵資料としての性格を有さないうえ、その中に、西南学院の歴史を知る上で貴重な資料も多く混じっているため、学内に大学図書館とは別に保管・閲覧できる場所を確保するようにとの要請が、大学図書館から当時の西南学院百年史編纂委員長に寄せられた。

百年史編纂委員会はそれを受けて協議し、その結果、学院創立 100 周年を記念して建設された百年館(松緑館)に資料センターが設置されたことから、日本におけるバプテスト研究、九州におけるプロテスタント研究の拠点となるようなバプテスト資料室の設置を学院に提案することにした。実はそれには伏線があり、これに先立ち、学院と神学部の間で「バプテスト連盟関係資料の利活用について」協議されている。学院側から 100 周年事業推進室を経由して「バプテスト連盟関係資料等の 100 周年事業推進室への移管」の願い書(2015 年 10 月 26 日付)が神学部に出され、当時の神学部長須藤伊知郎は同年 12 月 17 日付で以下のような回答を送っている。

- 1. 今後、バプテスト連盟関係の史資料に関し、継続的に発刊され受入を要するものがあるか。
  - (回答) 今後、継続的な受入の予定はございません。
- 2. 管理・保存する史資料の利活用方法はどのようなものか。

(回答: 2015年11月16日神学部教授会にて協議した内容)

- ①神学部の「実践神学」等の講義や、教会の現状分析、バプテスト連盟の会議資料・統計資料作成の際の参照資料として活用いたします。
- ②学院の歴史を調査するための資料として活用いたします。

来年度、開設されるバプテスト資料室が上述の使命を受け継ぐ施設であるとすれば、 須藤の回答「2」の「①」は、干隈時代の神学部の旧バプテスト資料室の設置目的の 一部である「その他の研修や調査に訪れる関係各位に広くお役に立つ『資料室』| を反 映しているように思われる。そうであれば、利用対象者も学院関係者以外に開かれる ことが想定されていることになる。なお同回答の「②」は、百年史刊行後、資料セン ターの「西南学院アーカイヴズ | 事業や大学の「西南学院史講義 | に引き継がれてい る。旧バプテスト資料の所蔵と保管が神学部から学院に移ったということは、今後、 これら資料群の保管・活用は学院が責任を持つことを意味している。そうであれば、 資料センターの運営、同センターの中長期に関する事業計画、人事計画などは学院の 理念とリーダーシップの下で進められることが期待される。しかしこれまで、後述す るように、実際のところは、学院史資料の保管や取り扱いはそのような認識によって 組織的に行われたとは考えにくく、むしろ学院側の施設計画の枠内で対応され、資料 保管やその責任部署もそれに沿って決定されて来た事実は認めねばならないであろう。 長い間、未整理のままで大学旧図書館5階に保管されていた神学部のバプテスト関 係資料は新築の百年館3階の資料保管室に移動され、その後資料センターの働きの一 部として、職員が整理や分類、配架を行った。加えて、資料センターは新資料の受け

資料センターの運営も軌道に乗り始めた 2020 年 4 月、関係者から神学部のバプテスト資料を今後どのように保管・活用し、新たな資料を収集するのかについて協議すべきとの声が出された。その結果、その課題に特化した検討委員会を立ち上げる必要を認識し、上位委員会の資料センター運営委員会に提議して、「バプテスト資料室検討委員会(以下「検討委員会)」が設置される運びとなった。筆者が委員長を仰せつかり、百年史編纂事業に貢献をされた小林洋一大学名誉教授、伊原幹治元西南学院中学校・高等学校校長、松崎尚志社会連携課長(当時)の各氏が委員として加わった。この委員会は、西南学院のバプテスト資料室の開設に向けて今後の在り方を検討し、資料センター運営委員会に報告、提案を行うために、月1回のペースで開催された。その後、この検討委員会は発展・解消し、現在の資料保存・運営委員会となり、坂東資朗中学校・高等学校宗教部長、劉雯竹学院宗教主事、事務局から宮川由衣アーキビ

入れや追加、定期刊行物の補填なども行った。

スト、山縣和彦資料センター職員を委員、小林洋一大学名誉教授、吉田直史社会連携 課長を陪席に迎えて機能を果たしている。

#### 2. 立ちはだかる諸課題の検討

検討委員会は資料室の2022年5月の開設を目指し、それに備えて考え得る限りの 角度から課題の洗い出しを開始した。その作業の多くは、当時の高松千博センター職 員に負うところが大きい。まず高松職員から、2017年に百年館3階に運び込まれた資 料の全容が分類別に報告された。内訳は(1)全国の主なバプテスト教会の個別資料 (教会総会資料、週報、『バプテスト誌』の記載記事のコピーを含む)、(2)各教会の年 表、(3)バプテスト派の学校や機関の個別資料・年表、(4)バプテスト関連の年表、 (5)戦前・戦中のバプテスト関連資料・会議資料(西部組合資料を含む)、(6)英文資料 (Proceedings [1861–1897], Gleanings [1894–1919], SBC Annual [1898–1958]), (7)戦後のバプテスト連盟年次総会及び理事会資料、(8)バプテスト関連の冊子・機関 誌・新聞等、(9)バプテスト以外の機関誌、(10)宣教師関連資料、(11)西南学院大学神 学部関連資料、(12)キリスト教関連の旧書籍、雑誌(和書・洋書)、(13)視聴覚資料 (レコード盤、VHS ビデオ、カセットテープ、オープンリール、マイクロフィルム、 フラッシュカード等、約2.000点)という、かなりの量であった。それが未整理のま ま、旧バプテスト資料室、大学図書館を経て、資料センターに持ち込まれていたので ある。この現状を確認し、開設に向けて検討された諸課題は以下の通りである。 (1) 規程の整備、(2) 資料室における閲覧に関するルール策定、(3) 関連諸機関との連携、 (4) 資料整備(具体的には、①所蔵資料の選別と補填による充実、②定期刊行物の追補、 ③官教師文書関連資料の取り扱い、④資料分類の再検討とデータ入力、⑤貴重資料の デジタル化、⑥宣教師等の直筆サイン入り書籍の取り扱い、⑦視聴覚資料の取り扱い と整備)、(5)資料室の場所の確保、(6)具体的な運営、以上である。同時に、2022 年 5月開設のスケジュールも確認された。

その後の検討委員会は、以上の洗い出された検討諸課題についてより具体的に詰めた議論を行い、それに基づいて 2020 年 9 月に「『西南学院バプテスト資料室』の在り方に関する答申書」をまとめ、資料センター運営委員長の今井尚生学院長に提出した。同運営委員会はこれを承認し、2022 年 5 月の開設を睨んで、具体的な取り組みが進められた。その一例は、バプテスト資料公開に関する大学図書館との協議と連携、検討課題(4)のための学生アルバイトの雇用、日本バプテスト連盟資料管理室との懇談などである。

しかし、その過程で、資料収集や所蔵資料公開の方針や実際、またそれに関連するルールの整備、バプテスト連盟担当部署との更なる認識共有および連携の実際に関係する諸課題が浮上してきたため、資料保存・運営委員会は協議の結果、開設を1年延期し、2023年5月開設に変更することにした。現在の計画では、2023年5月12日(金)の午後6時に開設記念行事を行い、東北学院大学学長の大西晴樹氏を講師にお迎えして、講演会を行っていただく予定である。これにあたり、学院より全面的な支援をいただくことが確認されている。これについて、この場で謝意を表したい。

#### 3. 彷徨する学院史資料と資料室

西南学院は創立 100 周年を記念して『西南学院百年史』の刊行を決定し、その準備として百年史編纂準備委員会を設置した。学院は、編纂作業のための新たな資料の発掘と研究に資する『西南学院史紀要』を発刊した。この紀要は創刊号(2006 年)から12号(2017年)を数え、百年史刊行とともにその役割を終えた。なお、その後継として本書『西南学院アーカイヴズ』が刊行されることになったことは記しておきたい。

全12巻の『西南学院史紀要』は実に様々な企画を盛り込み、読み物としては一定の内容を備えたものであった。その第3号(2008年)に「西南学院における学院史資料室・事務室の変遷」という興味深い論考が収められている。これは、当時企画広報課員であった世戸口職員が『西南学院七十年史』(以下『七十年史』)発刊を経て、当時(2008年)に至る学院史資料室・事務室の変遷を淡々と記録したものであるが、筆者にとっては学院の関係資料の保存とその意識や認識を知る上で有益な記録である。このたびのパプテスト資料室開設にあたり、改めてその論考を精読すると、パプテスト資料室の今後の運営に対する戒めのようなものを示唆されたように思う。

その論考は、移転を余儀なくされた学院史資料室の姿を丁寧に追っている。それによれば、学院は1967年までは学院史資料保存に特化した部署を設けておらず、その働きを「広報室の事務分掌」に位置付けていた。それが1967年に広報室が学院本部に開設されると、「学院史の編集に関すること」が職務分担として含まれるようになったが、それは『七十年史』刊行を意識してのことであった。しかし実際は、広報の発行、規程集の出版等、学院や大学広報の本務に追われ、「学院歴史の編集」に着手できなかったらしい。しかし、徐々に『七十年史』編纂に向けての具体的な動きは起こされてゆく。その中で、「広報室とは別個に独立した学院史編集室設置の必要」が提言された。理事会もまた学院史編纂を決定し、これが1973年の学院史編集室開設につながった。これについては、当時の学院長ギャロットの手腕を感謝すべきである。場所も旧本館

(現在は、大学図書館に建て替わっている)2階北側を得て、そこに事務室と資料室が設けられた。しかしその僅か3年後、学院史資料室は当時の自然科学館1階に移動となるが、そこは予定されていた電子計算機センターが移転してくるまでの、いわば「仮の住まい」であった。ここでは事務室に加え、展示室が配置され、写真展の開催なども可能となった。

さらに移転は続く、1979年に電子計算機センターが開設されると6号館(現在は、言語センターに建て替わっている)3階の教育実習室へと移転。2年後の1981年に同館2階へ移転したが、これとても学術研究所増設で当時の児童教育科教員の研究室が移転したため、その空きスペースを利用したものであった。次は、1987年に6号館から旧1号館2階へと移転したが、これも学生課移転に伴う空きスペースの有効利用であった。部署の移転で生まれたスペースの有効利用による移転であるので、当然ながらその都度、敷地面積もまちまちである。

そのような中でようやく正式な形で落ち着いたのが、1988年5月の創立記念日に1号館2階に開設した学院史資料展示室である。しかしこの場所とても「終の棲家」にはならず、旧1号館の老朽化に伴う建て替えで学院史資料展示室も閉室・取り壊されることとなり、学院史資料と展示物の内、主たるものは旧本館3階に移動。それ以外に収納・公開していた資料は、同館2階・3階・4階に分散展示され、その他の資料や古文書群は、6号館倉庫、図書館などに分散された。

この時期、当時の学院理事村上寅次より、学院史資料の保管のための資料館構想が提案され、1994年の「西南学院歴史資料館設置の必要性」の構想として提案されている。世戸口論考はその内容を紹介しているが、村上の構想は現在の資料センターの機能を超えた壮大なスケールを呈している。特に、アジア地域研究センター、博物館、学芸員資格取得施設の設置構想の先見性は優れていると言わざるを得ない。以上のような意欲的かつ先進的な構想は常任理事会で共有されるも、理事会では検討されていない。今から28年前のことである。後年、博物館、学芸員資格取得施設は形となった。しかしアジア地域研究センターの構想は、今日まで手付かずのままである。もしこれが他の構想案と同様に理事会で検討され、着手されていれば、現在の大学の研究環境や国際化はさらに豊かに発展していたかもしれない。加えて、次の事実は記しておきたい。村上はそれから間もなく1996年に召天した。その際、本人の遺志により、学院史資料整備基金として一千万円が特別寄付の名目で学院に寄付されたが、一般寄付扱いとされ、その後の使途は分からない。理由は「寄付の目的にあった施設が検討されなかったため」であるらしい(『西南学院史紀要』第3号、「西南学院における学院史資料室・事務室の変遷」、91頁)。事務処理上の諸事情があったこととは思うが、本来

的には、寄付者の遺志は尊重されてしかるべきであるので、筆者にとってこのことは 決して軽いことではない。

学院史資料室の「旅」はまだ続く。1997年、企画調整課の誕生と共に、学院史業務はこの課に引き継がれた。場所も本館 II に移転。敷地面積はこれまでと比べると格段の狭量となる。世戸口論考によれば、学院史資料室の面積は19.20m²、書庫16.00m²で、それは「資料室とは言え、歩くのに苦労するほど狭く、作業もできない状況にあった。収蔵できないものは、1 階小会議室や階段下倉庫などに分散して格納した」と記している。資料の「受難」とも言える状態である。

その後、2003年の事務局本部の組織改変によって、企画調整課と広報課が統合され、企画広報課が新部署として誕生した。それにより学院史業務は同課に移管されるも、学院史資料室は分化され、場所も企画広報課は本館2階、資料室は本館IIという分散した形で再び受け継がれる。移転はこれで終わりではなかった。2007年の西南子どもプラザの運営開始にともない、学院史資料室は再び移転を余儀なくされた。その後も学院最古の建物である西南学院講堂の大学博物館への改修、旧本館4階の小会議室、同窓会応接室の空きスペースの利用構想など、学院施設の変遷と共に資料室と学院史資料は移転を続けた。まさしく、「彷徨する学院史資料と資料室」である。

世戸口論考は、以上のような「西南学院史資料室の運命」とも言える歴史を、いくつかのポイントをあげてまとめている。その中で筆者に訴えかけたのは、次の叙述である。「事務室及び資料室の移転が4回もあったこと(下線筆者)、資料が分散され、集めた資料を十分に分類できなかったこと」。そして、資料室は、組織改変や建物の建て替えの計画に伴って、「また移転しなければならない」(下線筆者)運命を抱えているという点である。安住の地を見出せなかった学院史資料室と学院資料。それらはどれをとっても、学院と学院の歴史にとって悲劇ではないだろうか。

#### 4. 結びにかえて:高い志と使命を携えるバプテスト資料室

世戸口論考から透けて見えるのは、必ずしも褒められたものとは言い難い学院の、関係資料とその保存に関する見識である。開学 100 年の歴史を誇り、次の 100 年を目指して歩き始めた学院がこのままでいいはずはない。言うまでもないことではあるが、「資料」は「単なる書類」ではない。「歴史資料」は「過去の古紙」ではない。たしかに見た目は「紙類」ではある。しかしこれらの「紙類」には、学院の来し方のそれぞれの場面で、学院を愛し担った多くの人たちの顔と、その息づかいが込められている。変転する歴史の流れの中、ぶれることなく建学の精神に立ち続ける努力を重ね、学院

が未来に向かってその使命にふさわしく、そして善く歩むために、先人の苦闘を読み取るための知恵がつまった「紙類」である。いかなる機関も、とりわけ教育機関は、そのような資料を軽んじてはならない。書類に名を記されている人々と共に、名前を記されることのない無数の人々の働きによって、学院は今日あるからである。ドイツ敗戦の40年に当たる1985年、当時の大統領ヴァイツゼッカーが行った記念演説の一節にあるように、過去に目を閉ざすことなく、現在に盲目にならないようにしたい。

「学院の資料を古紙にしない。資料室を古紙の倉庫にしない」を旨とも、戒めともしてゆきたい。ここに資料室存在の意味と使命があると強く思う。バプテスト資料室は、学院史資料センターと共に、西南学院の建学の精神を伝え続ける使命を担わねばならない。加えて、国内の数少ないバプテスト派の教育機関のひとつとして、国内唯一のバプテスト派の神学高等教育機関を擁する学院として、バプテスト資料室は西南学院を超え、日本とアジアにおけるバプテスト研究、バプテスト派の神学教育研究の拠点としての高い志と使命を自覚して余りある働きを志すことが期待される。そのような施設として、学院全体でバプテスト資料室を育てていきたいものである。そのために、各方面からのご理解、ご協力を切に賜りたい。次の100年に向かって「Impacting the World」を標榜する西南学院の使命に応える資料室となりたい。まもなくその芽が出ようとしている。

## 西南学院初代院長條猪之彦の事蹟

安部 健一

#### 1. はじめに

西南学院の初代院長條猪之彦(1881〈明治14〉-1927〈昭和2〉)先生(以下敬称略)については、その在籍期間がわずか数か月と短かったことに加え、40代という若さで亡くなられたこともあり、その詳しい事蹟についてはあまり知られていない。

1986年4月に発行された『西南学院七十年史』には、「初代院長が選ばれるまで」(上巻、266~270頁)と題し、條の略歴をはじめ、條を学院に推薦した斉藤惣一(後述)のことなどが詳しく述べられていたが、2019年3月に発行された『西南学院百年史』では、『七十年史』の内容をかなり圧縮する必要があったとは言え、そういった内容が大幅に削除され、単に條が「熊本の玉名中学校の教諭であった」ということだけが述べられているに過ぎず、條が具体的にどのような人物だったのか、何故、西南学院に赴任することになったのかについては、一切触れられていない。(『西南学院百年史』通史編総論第2章第1節「西南学院の創立」47頁)

しかし、学院が創立 100 年を迎える中で、その『百年史』に象徴的であるように、「初代院長」について詳しいことが分からない、あるいはしだいに忘れ去られていくというのは、やはり残念である。また、「初代院長」について知ることは、創立前後の学院の状況について、いっそう深く理解することにつながるのではないか。さらに、歴代の院長は、現在の今井院長まで含めて 17 人存在するが、おそらくその中で條だけが、その生涯について知られていないことが多いのではないか。條の生涯とはどのようなものだったのだろうか。それを何らかの形で残すことはできないだろうか。

そう考えた筆者は先ず、学院史資料センターの高松千博氏(当時)に連絡を取り、 学院が所蔵する條猪之彦関係の資料の確認作業から探索を始めることにした。高松氏 から頂戴した資料は

- ①條猪之彦の略年表(以下「略年表」:『西南学院七十年史』編集の際に作成されたもの)<sup>1</sup>
  - 1 「略年表」はおそらく院長就任の際に提出された履歴書などをもとにして作成され たのであろう。

- ②京都バプテスト教会(同盟系。連盟系の「日本バプテスト京都教会」とは別)の 教会原簿 (條の受洗記録が書かれたもの)2
- ③受洗が行われた「疎水運河」の写真付紹介文(古書からの引用?)
- ④『日本バプテスト連盟史(一八八九~一九五九年)』(日本バプテスト連盟、1959 年発行)

などであった。さっそく「略年表」を頼りに條の人生をたどってみることにする。

#### 2. 故郷と家系について

「略年表」によれば、條は、1881(明治14)年4月23日、「熊本県下益城郡杉合村 大字杉島一五三〇番地 | (傍線筆者、後述) で生まれたとある。調べてみると、そこは その後の町村合併を経て、現在は「熊本市南区富合町御船手」という地名に変わって いた。何かしら手がかりとなるものがつかめるかもしれないと思い、休暇を利用して 訪ねてみた。

そこは熊本市南部を流れる加瀬川と緑川の中州(杉島)の北東部に位置し、北側か ら西側にかけては加瀬川、南側は田園地帯、東側は IR 鹿児島本線と九州新幹線など に囲まれた一角にあるが、その集落は周囲から孤立したような印象を受ける<sup>3</sup>。

後から考えると幸運と言うほかはないが、杉島地区にある寺院「南望山観音寺」の

2 識者にとっては不要であるが、筆者の心覚えもかねて『日本バプテスト連盟史(一 八八九~一九五九年) | (日本バプテスト連盟、1959年発行) および『西南学院七十年 史』などを参考にして「同盟」と「連盟」について簡単に確認しておきたい。

英国で誕生したキリスト教 (新教) バプテスト派のうち、米国において成立したも のが2つに分裂して生まれたのが「南部バプテスト連盟 | (1845年成立) と「北部バ プテスト連盟 | (1907年成立。後に「米国バプテスト連盟 | と改称)である。日本へ の伝道の開始は「北部」が早く、1873 (明治6)年、「南部」は1889 (明治22)年の ことであった。その後、日本における南北合同の機運が高まったのであろうが、1901 (明治34)年、「日本全体のバプテスト教会(日本浸礼教会)」(『西南学院七十年史』) の第1回総会が東京で開催され、その後「南部 | は「西南部会 |、次いで「西部組合 | として、「北部」は同「東部組合」として、時に対立しながらも協力関係を維持しつつ 発展していくことになる。両組合は第二次世界大戦前後の国策に沿った合併(「日本 バプテスト基督教会 | 〈1940〉次いで「日本基督教団第四部会 | 〈1941〉) の時期を経て、 1947 (昭和 22) 年、「日本基督教団」を離脱した「南部 (西部)」系の教会によって結 成されたのが「日本バプテスト連盟」であり、遅れて1958(昭和33)年、「日本基督 教団 | を離脱した「北部(東部) | 系の教会によって結成されたのが「日本バプテスト 同盟 | である。「西南学院 | は言うまでもなく、「日本バプテスト連盟 | と関係の深い 学校である。

3 後述するようにそこは「御船手組」によって形成された集落であり、そのために周 囲とは隔絶したような印象を持ったのかもしれない。

住職高見恒健(健治)氏、さらには、土地の歴史に詳しい吉村圭四郎氏(株式会社「瑞鷹」代表取締役副会長)から詳しいお話をお聞きすることができた<sup>4</sup>。

お二人のお話を総合すれば「御船手」とは、細川藩の参勤交代の際の水運などに従事した藩士のことで、水軍としての役割も持ち、そのような人々(「御船手組」)によって形成された集落の名前として現代の地名に受け継がれているということであった。この「御船手」の集落から加瀬川を挟んだ対岸が、細川藩の水運の拠点、年貢米を中心とした物資の集散地として知られる「川尻」の宿場である。川尻は軍港としての機能も持っており、周辺一帯を合わせると「常時、百艘ほどの藩船が配置されていた」(『ふるさとの歴史 川尻』川尻文化の会、2015)そうである。つまり、條家はそのような細川藩士「御船手組」の一族ということであった5。

驚いたことに観音寺には、「於島北部戸籍簿」というものが残されており、それによると條の住所も「熊本県下益城郡<u>杉合村字杉島村</u>1530番地」と書かれており、学院の「略年表」の記述とは若干異なっているが、生年月日などは「略年表」どおりである<sup>6</sup>。

また、当然そこには家族の名前も書かれており、それによると、祖父は東吾、祖母はエイ、父は東平、母はミ子であり、4歳年上の姉ハツと4歳年下の妹ツ子の3人きょうだいであった<sup>7</sup>。

また、観音寺には、「明治二○年六月字北崎検圖帳」というものも残されており、それによると條家は、屋敷がある一反二畝六歩(366坪)のほか、併せて一反一畝二三歩

<sup>4</sup> 観音寺にはいくつかの貴重な資料が残されており、その資料を示しながら熱心に 語られる高見氏のお話は非常に興味深いものであった。本稿で示した條の故郷に関 する内容は、基本的に高見氏の努力によって明らかになったものである。

また、吉村氏からは、特に「御船手組」についての詳しいお話をお伺いすることができ、高見氏からお伺いした内容と併せて、大いに参考になった。細川藩の参勤交代の際には、物資は「御船手組」の人々による海上輸送によって、一旦、「大里」(現北九州市門司区)や「鶴崎」(現大分市鶴崎、細川藩領)の港に運ばれ、そこで大きな船に移し替えて大阪、あるいは江戸に運ばれていたようである。

<sup>5</sup> 條の祖父「東吾」の名前はウェブサイト「肥後細川藩拾遺」の中の「有禄士族基本 帳」(明治7年)でも確認することができる。

余談になるが、杉島を通る県道50号線は、旧国道3号線であり、鹿児島方面から 熊本城下へ至る主要な街道である。西南戦争の際にも西郷軍の進軍経路となり、対 岸の「川尻」の宿には熊本城攻撃の際の本営や野戦病院が置かれ、この一帯は激しい 戦闘の舞台となったところである。想像をたくましくすれば、旧「御船手組」の一員 であった條の父「東吾」も何らかの形で西南戦争に参加していたのかもしれない。

<sup>6</sup> 住所については「戸籍簿」である以上、こちらの記述が正確であると考えられる。 高見氏の話によれば、村の合併に伴う新戸籍簿作成の際に処分されたものが、地元の 寺院である観音寺に収められたということである。

<sup>7</sup> 家族についてはその没年をはじめ詳しいことについては今のところ不明である。

(353 坪) の土地を 2 か所に分けて所有していたようである。

現在では條家そのものが絶えており、土地の所有関係については不明であるが、條 家があった辺りは、九州新幹線の工事と加瀬川の河川改修の結果、新幹線橋脚部の空 地と堤防とになっている。また、一族の墓地も当時の堤防の北側にあったようだが、 同じく河川改修の際に改葬され、その際に無縁墓地として合葬処理されたということ であった。



細川藩の軍港「御船手渡し場」跡(画像提供:『ふるさとの歴史 川尻』)

#### 3. 学生時代

#### (1) 小学校・高等小学校

「略年表」には小学校などの記載はなく、正確なことは確認できないが、高見氏の お話では、明治20年前後の当時の学制などから考えると「杉合東部尋常小学校」(4年 制)から「飽田南部高等小学校」(2年制)へ進んだうえで、旧制中学へ進学したので はないかということであった。ただ、詳しい資料は一切残されていないので、実際の 就学年齢や卒業年などについても不明である8。

<sup>8</sup> これらの学校はその後の複数回にわたる統合を経て、現在は、「富合小学校」と「富 合中学校」とになっている。「富合小学校」の教頭、木村氏のお話によれば、古い資料 は残っていないとのことであった。

#### (2) 中学校

「略年表」によれば、「熊本<u>県立</u>熊本中学校」(傍線筆者、現熊本高等学校)を1901 (明治34)年に20歳で卒業したことになっている。

同校は、1900 (明治 33) 年、「熊本県中学済々黌」が生徒増のために「第一済々黌」と「第二済々黌」に分割されたうちの「第二済々黌」として発足したもので、同年 12 月に「熊本県熊本中学校」と改称、さらに翌 1901 (明治 34) 年 6 月に「熊本県立熊本中学校」と改称されている。いわゆる「済々黌」が「熊本県中学済々黌」を名乗るのは 1899 (明治 32) 年のことであり、その前の 5 年間は「熊本県尋常中学校」と称していた。ということは、條が入学したのは「熊本県尋常中学校」であるが、「熊本県中学済々黌」および「第二済々黌」の時期を経て、卒業は「熊本県熊本中学校」(第1回)ということになるのである。

何か当時の資料が残されていないか、同校の同窓会組織「江原会」に問い合わせたところ、同事務局から送られてきたのが、條が同校発行の雑誌『江原』創立十周年記念号に寄稿した「祝辞」と題する一文であった。貴重なものなので全文引用する。なお、旧字、旧仮名遣いなどは固有名詞を含めて現代のものに改め、さらに句読点なども適宜追加した。

#### 祝辞 第一回卒業生総代 條 猪之彦

明治四十三年十月三十日我が母校に於て創立第十周年の記念式を挙行せらるるを聞く、誠に歓喜にたえざるなり。顧みれば十有幾年の昔、余等の母校に学ぶや母校は未だ熊本中学校と称せずして、藪の内にありて済々黌と称しき。其の分れて第一済々黌第二済々黌となるや、我等は第二済々黌に属して薮の内にのこり、第一済々黌はいまの済々黌の前身となれり。間もなく第二済々黌は熊本中学校と改称して実に我が母校の基礎をなせるなり。当時余等は五年級の餓鬼大将にてありき。薮の内の寄宿舎にありて天下を睨視したる当時を思えば、転た感慨に堪えざるなり。其の後母校を卒業して既に十年を経たるが帰省すれば今も尚お必ず先ず母校に至りて校長閣下並に諸先生を訪い過去を語り将来を談じて以て無上の楽しみとはすなり。思うに創立十年と称する中学校は尚お他に少なからざるべし。而

<sup>9 「</sup>済々黌」は、もともと「私立学校」として創立されており、1901 (明治 34) 年 12 月、「県立学校」に移管された際に「第一済々黌」は「熊本県中学済々黌」、「第二済々黌」は「熊本県熊本中学校」と改称される。條が卒業した 1901 (明治 34) 年 3 月当時は「熊本県熊本中学校」であるが、卒業後の6月に「熊本県立熊本中学校」と改称される。なお、後に載せた「祝辞」の記述から推測すれば、中学への入学は、1897 (明治 30) 年 (16歳) ということになる。

かも其の卒業生が母校に至りてアットホームに感ずるものそれ幾何かある。余等 のかく母校をしたう念あるは故あって存するなり。古き学校の建物を恋うにもあ らざるなり。校長閣下は創立以来の校長にして諸先生の大半も亦創立以来の先生 なり。而して今も尚お温顔を以て余等に接し余等の将来に対しては我が子のそれ の如く心をいため給う。かくて余等の母校に至るや実に家庭に帰れるの思いある が故なり。余かつて菊池総長のケムブリッヂ大学に於ける学生生活の話を聞ける 事あり。ケムブリッヂ大学を出でたるものは皆母校大学に至ればアットホームに 感ずとの事なり。我が母校を以てケムブリッヂ大学に比する、もとより其の事情 の異なるものあらんも此の点に於てはなはだ相似たるを思うなり。是れ必ずしも 余が我田引水には非ざる也。英人がケムブリッヂ大学に学べるを誉とする如く余 は我が熊本中学校に学べるを誉とするものなり。今我が校に記念式を挙行せられ 並びに記念運動会の催しあるを聞き、身は遠地にありて親しく此の盛典に列する の栄を得ずと雖も遥かに其の有様を偲べば諸先生の風貌目前に彷彿し、余等が薮 の内時代の事をも追想して現に在学の諸兄も亦余等がなせし如く活発に無邪気に 諸先生の温かきご指導のもとに跳び且つはねて面白き日を暮らし居らるるをおも うなり。余は確信す、我が校に学べる諸兄は幸なりと。希わくは諸先生並びに諸 兄健在なれ。聊か所感を述べて祝詞に代う10。

この文章が書かれた当時、條は後述するように「秋田県立本荘中学校」の教師をしており、條の理想とする学校や教師の在り方がうかがえる興味深い一文と言える。また、事務局によれば、「卒業生総代」とは、首席で卒業したことを意味するということであった。また、文中「薮の内の寄宿舎にありて」という表現から、條は中学から寄宿舎生活を送っていたことが分かる。当時の寄宿舎は学校の敷地内に建てられていた。今なら車で30分程度の道のりであるが、当時の交通の便を考えると、やはり寄宿舎に頼らざるを得なかったのであろう。

#### (3) 高等学校

熊本中学を卒業した條は、1901 (明治 34) 年、地元熊本の「第五高等学校」(五高、 現在の熊本大学) に進学する。当時の五高は無試験で帝国大学に進学する「大学予科 (第一部法科、文科、工科・第二部理科、農科・第三部医科)」と「工学部」(後に「熊

<sup>10</sup> 文中「薮の内」は現在の熊本市中央区城東町、上通町一帯の地名。また「菊池総長」 とは東京帝国大学総長、学習院院長、京都帝国大学総長などを歴任した「菊池大麓」 のこと。文章執筆当時は京都帝国大学総長。

本高等工業学校」として独立の後、現熊本大学工学部となる)から成り立っており、 條は「第二部理科」に入学した<sup>11</sup>。

何か当時の資料はないか、五高の歴史資料を保存展示する「熊本大学・五高記念館」に問い合わせたところ、研究員の藤本秀子氏から紹介されたのが、五高の校友会(「龍南会」)が発行していた『龍南会雑誌』の存在であった。『龍南会雑誌』は熊本大学図書館によってデジタル化されており、パソコンで閲覧可能である。もしかすると條も何か文章を残しているかもしれないと思い、数年分(第84号から第107号)を確認してみたが、残念ながらそれらしきものは見つからなかった。

しかし、第107号の「雑報」の中に1904 (明治37)年の「卒業証書授与式」の記事が掲載されており、その中の「第二部理科」の名簿に「條猪之彦」の名前も載せられていた。この時の卒業生の数は、法科が72人と圧倒的に多く、次いで医科の37人、工科の36人、文科の22人、農科の10人と続き、理科は最も少ない8人であった。

名簿には卒業生の進学先も記されており、それによれば條は「東京帝国大学」となっている。筆者は目を疑った。「略年表」の記載はもちろん、学院史の中で、條が「京都帝国大学」の出身であることはいわば「常識」である。これは一体どういうことであろうか。そもそもその大学の卒業も「1910(明治 43)年」となっており、五高の卒業から6年後のことである。当時の大学は3年制であり、6年は長すぎる。その間にいったい何があったのか。とにかく、まずは東京帝国大学への進学の有無を確かめなければならない。そこで筆者は東京大学の理学図書館に連絡し、当時の資料が残っていないかどうか問い合わせることにした。

すると同図書館からすぐに連絡があり、ウェブサイト「国立国会図書館デジタルコレクション」の中の『東京帝国大学一覧』および『京都帝国大学一覧』の存在をご教示いただいた。また、同時に條緒之彦の名前が掲載されている箇所もご教示くださり、それによって條の大学進学についての「新事実」を含んだ概略を理解することができたのは実にありがたいことであった。

#### (4) 大学①東京帝国大学理科大学

『東京帝国大学一覧』(明治 37 年~38 年) によれば、條が最初に進学したのは『龍南会雑誌』の記載の通り、「東京帝国大学理科大学(現東京大学理学部)」であった。1904 (明治 37) 年、23 歳の時である。しかも條が所属したのは、後に京都帝大で専門

<sup>11</sup> 後述の「卒業証書授与式」の記事から言えば、五高生の進学先は、東京帝国大学、京都帝国大学および同福岡医科大学(後の九州帝国大学医学部)の3校だけであったようだ。

とする「化学科」ではなく、「物理学科」であった。ちなみに五高の理科を卒業した 8人のうち、「京都帝国大学理工科大学(現京都大学理学部、工学部)」の「理学科」に 進んだ1人を除き、7人が「東京帝国大学理科大学」に進み、そのうち條を含む4人が 物理学科、残りの3人が地質学科への進学であった。

同一覧によれば、明治 37 年に物理学科の 1 年に在籍していたのは 14 人であるが、條を含めてその後、彼らがどうなったかを見てみたい。なお、当時の物理学科は 2 年次から「理論物理学科」と「実験物理学科」とに分かれていたようである。翌明治 38 年度の同一覧(明治 38 年~39 年)が欠本のため、明治 39 年度の同一覧(明治 39 年~40 年)を確認したところ、37 年入学生 14 人は順調に行けば 3 年次に進級しているはずであるが、名前が確認できる者(在籍者?)が 10 人、そのうち 3 年次に進級していた者は、理論物理学科に 2 人、実験物理学科も 2 人のわずかに 4 人であった。この 4 人は翌明治 40 年には無事に大学を卒業している 12。

條と同級の五高出身者 4 人については、いずれも落第を経験しており、理論物理学科 2 年に 2 人、実験物理学科 2 年に 1 人、1 年原級が 1 人、そしてその 1 年原級の 1 人が條であった。当時の東京帝大の進級の難しさがうかがわれる数字と言えるが、それにしても條に何があったのか。今となっては何も資料が残されていないので、詳しいことは分からないが、その翌年の 1907 (明治 40)年、條は東大を退学し、「京都帝国大学理工科大学」に入学する。既に 26 歳である。

#### (5) 大学②京都帝国大学理工科大学

『京都帝国大学一覧』(明治 40 年~41 年)を確認すると、「理工科大学」の「理学科」の「40 年入学」者 14 人の中に「條緒之彦」の名前も見える。「理学科」は、1904 (明治 37)年、それまでの数学科、物理学科、純正化学科の 3 学科が統合されて誕生した学科であるが、條の入学の翌年の 1908 (明治 41)年、再び分離してもとの 3 学科に戻る。條が 2 年次以降、所属したのは「略年表」に記されていたとおり「純正化学科」であった。同期入学の 14 人のうち、「純正化学科」に進んだ者は 6 人、さらにそのうち順調に 3 年間で卒業した者は 4 人、條はその中の一人であった<sup>13</sup>。

東京帝大では進級することなく退学した條であったが、京都帝大では順調に3年間

<sup>12</sup> 條と同じ物理学科の同級生で、順調に3年間で卒業した2人のうちの1人が、後に 東洋音楽の研究で文化功労者(1981年)となった田邊尚雄(1883-1984)である。

<sup>13</sup> 條と同年に純正化学科を卒業した他の3人のうち、特待生となった堀場信吉 (1886-1968) は、その後京都帝国大学教授、東京工業大学教授、同志社大学教授等 を歴任し、文化功労者(1966年)となる。また、同じく小林松助(生没年未詳)は、 東北帝国大学教授や日本化学会会長を務めた。

で卒業することができたわけである。学科全体の進級の状況から考えても、京都帝大の進級が容易だったとは考えられない。とすると、東京帝大での原級の原因は、やはり学力以外の問題であったのだろうと思われる。東京帝大の「物理学科」から京都帝大では「純正化学科」へ専門を変更したことから考えると、あるいは専門学科についての疑問などもあったのかもしれない。條が受洗するのが、京都時代であることなども併せて考えると、何らかの健康上の問題、あるいは精神的な問題などがあったのかもしれない。

#### (6) 大学③受洗と京都バプテスト教会

最初に掲げた「京都バプテスト教会」の教会原簿によれば、條が受洗して信仰の道に入ったのは1909(明治42)年2月14日、京都帝大在学中の28歳の時であった。

現在の「京都バプテスト教会」の牧師は、『西南学院百年史』編集の業務にかかわった西南学院 100 周年事業推進室におられた松岡正樹師である。條の受洗の記録も松岡師が学院に送ってくださったものである。松岡師のお話によれば、「京都バプテスト教会」は 1901 (明治 34) 年の創立 (伝道開始は 1897年)、現在の教会は、河原町丸太町の交差点から北に 100 メートルほど上ったところから西に入った路地に建てられているが、以前は丸太町通りと御池通りの間の河原町通りに面したいくつかの町屋を転々としていたという。條が通っていたのもそういう時期の教会だったことになる。記録によれば、授洗者は宣教師の G.W.ヒール、受洗の場所は「琵琶湖疎水」(琵琶湖と京都を結ぶ水路)であったというが、松岡師によれば、当時左京区の岡崎付近にバプテストの宣教師館があり、おそらくその近くの「琵琶湖疎水」で授洗が行われたのであろうということであった。受洗の動機や教会での活動等についても、それ以外の資料がまったくないので詳しいことは一切分からない。(傍線筆者)

ただ、当時のキリスト教の拡大、あるいはそれに伴う学生 YMCA (基督教青年会)活動の活発化などが、條を含む当時の学生たちに与えた影響も看過できないのかもしれない。YMCA に関して言えば、1880 年代以降、毎年のように全国の主要都市をはじめ、各地の大学や高校に YMCA が結成され、多くの学生たちが活動に参加してい

<sup>14</sup> 大幸勇吉 (1867-1950) は石川県出身、東京帝国大学理科大学化学科卒。第五高等学校、東京女子高等師範学校、京都帝国大学理工科大学各教授を歴任。1932 (昭和7)年帝国学士院会員。理学博士。

る。東京帝大と一高(現東京大学)でYMCAが組織されたのが1888(明治21)年のこと。三高(現京都大学)では1889(明治22)年に「基督教青年同盟会」が結成され、1897(明治30)年に創立された京都帝大でも、その2年後の1899(明治32)年に、後に「地塩会」と命名される「京都大学青年会」が結成されている。條の母校である五高でもYMCAの組織「花陵会」が結成されたのが1896(明治29)年のことであった。條もYMCAとの関係があったのではないかとも考えられるが、現在のところ、それは確認できていない。

それにしても、日本における YMCA の歩みをたどってみると、日本におけるキリスト教の拡大と軌を一にしているようにも感じら



30 歳頃の條猪之彦 (画像提供:京都化学々士会『会報』第5号)

れ、明治から大正、昭和にかけて日本のキリスト教は大学生や高校生に支えられてき たのではないかとまで思えてくる。條が受洗した「京都バプテスト教会」にもおそら く多くの学生たちが通っていたのではないか。

條がどのような経緯でキリスト教と出会い、「京都バプテスト教会」の会員となったのか、詳しい事情は分からないが、信仰生活に入ったことが、西南学院との出会いをもたらしたことだけは確かである。

#### 4. 教師時代

#### (1) 中学教師①-秋田県立本荘中学校(現秋田県立本荘高等学校)

「秋田県立本荘中学校」は 1902 (明治 35) 年、秋田県の南部に位置する本荘町 (現由利本荘市) に、秋田県で4番目の中学校として設立された学校である。

「略年表」によると、條は、1910 (明治 43) 年7月13日に「京都帝国大学理工科大学純正化学科」を卒業、同年11月12日に、無試験検定により師範学校中学校物理および化学科、高等女学校理科(物理化学)の教員免許を得たのち、同16日に「秋田県立本荘中学校」の「教諭心得」となり、同30日に「教諭」となっている。また、略年表によれば翌1911 (明治44)年1月18日には舎監にも就任している。

当時の教員検定は、文検による試験検定の他、無試験検定制度もあり、「指定学校」

として帝国大学・高等学校・実業専門学校などの官立高等教育機関卒業者や、「許可学校」として文部大臣の許可を得た公私立学校卒業者に、中等教員免許が与えられていた。條も帝国大学の出身であり、この制度によって免許を交付されたものであろう。 條はこの学校で2年間を過ごすことになる。

條がなぜ出身地である九州から遠く離れた秋田県の中学に職を求めたのかについては不明である。また、わずか 2 年間で同校を離れることになった経緯についても不明である。同校に何か資料が残されていないか、問い合わせてみたが、ほとんど何も残されていないようであった。ただ、同校事務室によれば、同校の記録の中に、1912 (明治 45) 年 1 月 1 0 日に行われた「通俗講演会」に講師として出席したというものが残されている、ということであった。また、同校の同窓会名簿(2017 年発行)では、條の在職期間が 1 19 1 (明治 1 44) 年 1 月 1 月 1 5 1 9 1 2 (明治 1 5 1 5 1 7 1 8 1 7 1 8 1 9

#### (2) 化学研究への取り組み

時期的には本荘中学校在職中に出されたものであるが、驚いたことに、條の研究論文がネット上に残されていたのである。教えてくれたのは、筆者の職場の同僚である藤原静郎教諭であり、同教諭がネット上から見つけ出してくれたのが、「チオ硫酸カリウムの水化物、其溶解度及び其轉移温度に就て」と題された化学研究論文であった。掲載されたのは1912 (明治 45) 年発行の『東京化學會誌』第三三巻七号であり、発行元の「東京化學會」は、現在、国内最大の化学系学術組織「日本化学会」の前身である。ということは、化学の世界では権威ある雑誌であろう。京都帝大卒業後2年目、本荘中学在職中の1912 (明治 45) 年の発行ということから言えば、卒業論文か、あるいはそれをもとにして本荘中学在職中にまとめられたものかもしれない。いずれにしても全国組織の学会誌に掲載されるほどのものである以上、ある程度の水準に達したものであったのだろう。

その「緒言」には、「チオ硫酸ナトリウムに就ては従来諸種の点よりの研究頗る多しと雖も之れに相当するカリウム塩なるチオ硫酸カリウムに至りては其研究頗る僅少にして其水化物の知られたるもの次の如し(化学式の羅列 — 中略)而かも此等の水化物の存在し得る諸条件に至りては未だ確然たる決定を見ざるなり本研究の目的は種々の温度に於けるチオ硫酸カリウムと其結晶水間の平衡を研究して前掲の水化物の組成を確定し同時に其溶解度を測定して此等水化物間の転移温度を決定するにあり」(旧字

は新字に改めた)と書かれているが、筆者にはよく分からないので、やはり筆者の同僚で化学を専門とされる横谷聡教諭にお尋ねしたところ、要するに、研究の少ない「チオ硫酸カリウム」について、その含まれる水の割合を温度との関係から検証したものであるらしい。そもそも「チオ硫酸カリウム」とは、化学の実験の際に使われる還元剤のひとつで、同じような働きをするものに「チオ硫酸ナトリウム」があり、こちらは研究論文も多く、より一般的であるが、「チオ硫酸カリウム」の方は、條も書いていた通り論文も少なく、そのために條の論文は、現在でも度々引用されることがあるということであった。

また、その末尾には「本研究は大幸教授の懇篤なる指導の下に成りたり謹みて茲に謝意を表す」と書かれており、前述の通り、大幸勇吉(注 14 参照)の指導を受けていたことが確認される。條もあるいは研究者の道も志していたのかもしれないと思われる資料である。

#### (3) 中学教師②一熊本県立玉名中学校(現熊本県立玉名高等学校)

「略年表」に詳しい記載は無いが、「官報」第八六五〇号の記事によれば、條は 1912 (明治 45) 年 3 月 31 日付で「熊本県立玉名中学校」の「教諭」に就任している<sup>15</sup>。

玉名中学校は、1903 (明治 36) 年、條の母校である「熊本県立熊本中学校」の「分校」として開校、3年後の1906 (明治 39) 年に「熊本県立玉名中学校」として独立した学校である。

條が赴任したのは、独立からそれほど間もない、いわば草創期の頃であり、学校が 安定するまでの間の様々な苦労があった時期であると思われる。

『西南学院七十年史』上巻の275頁「『私立西南学院』の設立認可と初代理事長の就任」の項には次のように書かれている。

「当時玉名中学校では同盟休校騒ぎがあり、校長は辞任、同校の<u>教頭</u>であった條は、校長代理として難問題の解決にあたっていた。ちょうどその時、條は学院の院長に選ばれたのである。それで、学院の開校準備の会合にも出席せねばならず、過重な仕事に心身を消耗し、健康を害した。やがて、玉名中学校の後任校長も決まり、條院長は、単身福岡に赴任、福岡市通町に居を定め、創立業務に専念することになった。」(傍線

<sup>15 『</sup>玉名高校創立八○周年記念同窓会名簿』(玉名高校同窓会、昭和58年11月発行) にも、條の在籍期間として「明治45年3月~大正4年12月」と記されている旨、同同窓会事務局で確認していただいた。また、『西南学院百年史』では「教諭」と改められたが、『西南学院七十年史』をはじめとする学院の資料では、條の身分は「教頭」となっている。ただ、後述するように、條の身分や役職については確認できていない。

#### 筆者)

「同盟休校」や「校長の辞任」などとは大問題である。條が院長に選ばれたのは、後述するように 1915 (大正 4) 年 5 月頃のことである。「ちょうどその時」が、この頃とすれば、この年の春頃、あるいはその前後かもしれないが、いずれにしても「1915 (大正 4) 年」頃にこれらの「大問題」が起こったことになる。そして、條が「校長代理として難問題の解決にあたっていた」のならば、当時の記録に條の働きも残されているかもしれない。そこで筆者は出張の折に熊本市立図書館を訪ね、『玉名高校七十年史』(熊本県立玉名高校 昭和 48 年 10 月 1 日発行)で確認することにした $^{16}$ 。

ところが、『玉名高校七十年史』には、そのようなことに関する記述は一切残されていないのである。それどころか、大正4年から昭和8年までは「順風満帆」(同七十年史)の時代ということになっているのである。「校長の辞任」については、1913 (大正2)年、初代の甲野吉蔵校長に代わり第二代の沼田博雄校長が就任しているが、沼田校長は1920 (大正10)年までその職にあったことになっている。つまり「1915 (大正4)年」ごろには、「校長の辞任」などはありえないのである。これは一体どういうことであろうか。そこで改めて玉名高校に問い合わせてみると、図書館に若干の資料が残っているということで期待したが、図書館の司書氏によると、やはり大正時代の記録はほとんど残されていないということであった。ただ、大正3年および4年の卒業写真が残されており、そこには、肩書きのない「條先生」として紹介されており、「教頭」は、別に存在するということであった。したがって、『西南学院七十年史』に書かれたように、條が「教頭」や「校長代理」を務めていたかどうかについては、現在のところ確認ができない状態である。また、それ以上の資料が無いので、條がどのような教師生活を送っていたのかについても確認はできていない」「。

ただ、本荘中学にしろ、玉名中学にしろ、創立 10 年未満の学校でのさまざまな体験は、西南学院の創立の際にも何らかの形で活かされたのではないかと思われる。

<sup>16</sup> 玉名高校編纂の学校史には『玉名高校七十年史』のほか、同百年史(2007年4月発行)も存在するが、内容は、七十年史以降の歴史を加筆したものであり、それ以前の叙述内容は同じである。

<sup>17 「</sup>西南学院」が県知事の認可を受けたのは 1916 (大正 5) 年 2 月 15 日のことであるが、その 2 日前、2 月 13 日付の「九州日報」に「西南学院開設」と題して「西南学院」の開校に関する記事が掲載されている。そこには「…同院の特色は教育勅語の主旨を奉戴し、基督教主義に依りて中学程度の教育を施し…院長は京大理学士條猪之彦氏不日赴任の筈にて氏は是迄熊本縣立玉名中學校教頭を奉職せし人なり」(傍線筆者)と書かれており、当時、すでにそのような「誤解」が生じていたのかもしれない。だとすれば、『西南学院七十年史』もそのような「誤解」を踏襲したのであろう。

# 5. 西南学院時代

# (1) 西南学院院長就任-斉藤惣一による推薦

玉名中学校在職中の條に対して、新たに開設される西南学院の院長就任の要請はいつ頃あったのか。

『西南学院七十年史』(上巻)によれば、1915 (大正 4) 年 1 月 6 日、C.K.ドージャーが、ミッションボード (米国南部バプテスト連盟外国伝道局)書記の T.B.レイから、男子中学校開設を承認するとの正式書簡を受け取った後、学院創立のためのいくつかの会議が開かれたようであるが、校長については、5 月 6 日に佐世保で開かれた在日宣教師会議で、「委員会は、調査の後、玉名の中学校の教頭である條猪之彦氏を福岡における男子中学校の校長に推薦する。」ことになったということである。(傍線筆者)

続いて、『七十年史』には、「7月3日、C.K.ドージャーは、新たに選ばれた校長條猪之彦と相談した」と記されている。ということは、おそらくこの1月から5月までの間に院長就任の打診があり、7月に最初の正式な会合があったのであろう $^{18}$ 。

そして、この院長就任に深く関わったのが斉藤惣一(1886-1960)である。

院長決定の経緯について斉藤惣一は『西南学院創立三十五周年記念誌』(1951)の中で「創立当時の思い出」として次のように述べている。

「…私が熊本の五高の教師であった頃、ほとんど毎月のように、西南学院創立の委員会に出席した。或る時は福岡、ある時は長崎、といった具合に、よく夜行で熊本に帰った記憶がある。…いよいよ開校の運びとなった。しかし、どうしても適当な日本人の校長が見つからぬ。そこで最初に私に就任をということになった。…その頃、私に極めて親しい間柄であったクラーク先生、特にその夫人が女学校設立に熱心で、私にぜひ、骨を折れというご希望があり、また一方、私の父と親しい寺内正毅大将が総理大臣となり、その秘書官にという話もあり、他方、数年に亘って熱心に私の学生時代から指導してくださった、YMCAのゲーレン・エム・フィッシャー氏が、私に YMCA の主事になれという勧めがあった。私は相当迷ったが、遂に意を決して上京、YMCA の仕事に献身することとなった。そこで、西南学院の方には、條理学士をお願いすることとなった。」(本文は『西南学院創立三十五周年記念誌』、4頁)19

斉藤惣一は、現在の北九州市門司区に生まれ、豊津中学校(現在の育徳館高校)から第五高等学校(現在の熊本大学)を経て東京帝国大学文学部英文科に進み、卒業後

<sup>18 『</sup>西南学院七十年史』上巻、261~263 頁

は母校である五高の教授となった。中学生時代に下関の下関浸礼教会で洗礼を受け、高校では YMCA (前述の通り、五高では「花陵会」と称する)に入会していた斉藤は、東大での学生時代、さらに教師となってからも熱心にクリスチャンとしての活動を続けた。西南学院の創立者 C.K.ドージャーとの交流が生まれたのは、後述するが、おそらく大学生の頃だと思われる。その後、五高の教授となった斉藤は、「理事」として学院の創立に深く関わることとなり、学院の初代院長を委嘱されることとなったのである。しかしこの時、斉藤の「思い出」の中に書かれていたとおり、斉藤には西南学院院長のほか、YMCA 同盟主事への就任も要請されており、悩んだ末に斉藤は、YMCA同盟主事を選ぶことになるわけだが、その時に自分の代わりに推薦したのが、五高では5年上級の先輩にあたる條緒之彦であった。

斉藤は西南学院創立の翌年の1917年、五高の教授を辞してYMCA 同盟主事に就任、 その後、総主事となり、関東大震災後の復興や太平洋戦争前後の国際関係の改善に尽力、戦後は引揚援護庁初代長官や国際基督教大学建設実行委員長などを務めた。

ちなみに西南学院高校では、斉藤と関係の深い YMCA 東山荘で 40 年以上にわたって「林間学校」が続けられているが、それも西南学院と斉藤惣一、そして YMCA との不思議な縁を感じさせるものである。

# (2) 斉藤惣一と C.K.ドージャーとの出会い

それでは條を院長に推薦した斉藤と C.K.ドージャーとはどこで出会ったのか。『日本バプテスト連盟史 (一八八九~一九五九年)』(日本バプテスト連盟、1959年発行) および『西南学院七十年史』の記事を総合すると、二人の出会いは斉藤がまだ大学生であった 1909 (明治 42) 年のことであったと思われる。

1909年の5月に東京で開かれた南北バプテスト合同による「日本浸礼(派)教会」第10回総会の、下関教会からの代議員としてドージャーと斉藤の二人の名前が列記されているのである<sup>20</sup>。

斉藤はこの時、東京帝大の1年生であったが、受洗した下関教会の東京在住の関係

<sup>19</sup> 文中、「クラーク先生」とは、「熊本バプテスト教会」の宣教師であった「W.H.クラーク」のこと。クラーク夫人が設立を望んだ「女学校」は、クラーク夫妻が望んだ熊本ではなく、小倉に「西南女学院」として創立される。また、「寺内正毅大将が総理大臣となり」とあるが、寺内正毅陸軍大将の総理大臣就任は、西南学院創立の翌年、1916 (大正5)年10月のことであり、話が合わない。斉藤惣一のYMCA主事への就任は1917 (大正6)年のことであり、おそらく記憶の混同が生じたのであろう。なお、斉藤惣一の父、「勇熊」は長州藩出身の陸軍の軍人であったが、惣一が14歳の時に病気で亡くなっており、そのために斉藤は、学業を一時中断することになる。

者(?)として、数少ない「西南部会」の出席者に選ばれたものと思われる21。

ドージャーの方は、ここに斉藤との不思議な縁を感じさせるものがあるのだが、ドージャーが宣教師として下関教会に赴任したのはその前年の1908年のことである。もともと下関教会は、というか、山口県は「北部バプテスト連盟」の伝道区域であったが、1908年に開かれた「日本浸礼(派)教会」第9回総会において、「南部バプテスト連盟」(西南部会)の伝道区域に移管されることになったため、「11月にC.K.ドージャー師が佐世保から下関に一時駐在することに」なったということである(傍線筆者、『日本バプテスト連盟史(一八八九~一九五九年)』112~113頁)。その「一時駐在」の時に斉藤との出会いがあったわけである。(注20)で示したとおり、斉藤は、五高時代には「熊本バプテスト教会」に所属して活動しており、斉藤の「創立当時の思い出」に書かれていたように、斉藤と同教会の宣教師、W.H.クラークとは「極めて親しい間柄であった」。とすれば、当然、クラークからドージャーに対し、斉藤に関して、何らかの連絡はあっていたに違いなく、そういったさまざまなつながりが二人を結びつけたのだと思われるのである。

伝道区域の移管、ドージャーの一時的駐在、斉藤の東京在住、斉藤とクラークの縁、さらに言えば、斉藤が下関教会で受洗したのは、父の死による経済的事情から中学を休学し、下関で生活していた時のことであり、これらのいくつもの偶然が重なり合って、ドージャーと斉藤との出会いがもたらされたと言えるのである。別の言い方をすれば、いくつもの不思議な偶然が重なって一つの大きな出会いがもたらされ、その結果、條の院長就任が実現したとも言えるのである。

ちなみに、斉藤とドージャーとが出席した 1909 年の第 10 回総会における主要な議題が、北部バプテスト系の「横浜バプテスト神学校」と南部バプテスト系の「福岡バプテスト神学校」の合併問題、すなわち「日本バプテスト神学校」の設立とそれに伴う「福岡バプテスト神学校」の閉鎖に関することであった。結果は圧倒的多数で合併

<sup>20 『</sup>西南学院七十年史』上巻、194 頁、『日本バプテスト連盟史(一八九九~一九五九)』114 頁。また、「日本浸礼(派)教会」については、『西南学院七十年史』および『日本バプテスト連盟史』で表記が統一されておらず、とりあえず括弧で示した。また、表記が統一されていないことについては、教会名についても言えることで、「下関教会」も「下関浸礼教会」あるいは「下関バプテスト教会」とも表記されている。その他の教会についても同様で、参照資料中、最も多く使用されていると思われる呼称を基本的に使用した。

<sup>21 『</sup>斉藤惣一と YMCA』(海老沢義道著、1965 年、斉藤伝記念出版委員会)によれば、 斉藤の五高時代の「所属教会」は「熊本バプテスト教会」と記されており、五高の教師となった後も「熊本バプテスト教会」で活動していたようだ。斉藤の事蹟に関しては、同書によるところが大きい。

案が可決され、福岡の地から神学校が移転することとなった。

ところが、これに納得できなかった南部系の「西南部会」の人々によって 1911 (明 治 44) 年に新たに作られたのが、「福岡バプテスト夜学校」であり、これが「1916 年 の西南学院誕生に繋がっていく」(『西南学院百年史』 通史編総論第1章第4節「西南学院の源流1 | 27 頁)ということになるのだから歴史はおもしろいのである。

そういう意味では、「福岡バプテスト神学校」の閉鎖を決めた、この第 10 回総会こそが、ドージャーと斉藤という二人の出会いを演出しながら西南学院創立のきっかけを作ったと言えなくもないのである。

# (3) 斉藤惣一と條猪之彦との出会い

斉藤惣一とドージャーとの出会いの場は、「下関教会」を中心とするものであった。では、斉藤惣一と條猪之彦は、どこで出会ったのか。『西南学院七十年史』には、「條もまた、バプテストの会員であったと<u>考えられる</u>。」(傍線筆者)と書かれているだけで、詳しいことは何も書かれていない<sup>22</sup>。

斉藤と條との接点については、いくつかの可能性が考えられる。旧制高校は同じ五 高であり、大学も東京帝大ということであれば共通する。また、條が京都帝大に進学 した後も、YMCA などの活動を通して、あるいは交流があったかもしれない。

ただ、條と斉藤とは5歳違いであり、五高、東京帝大と学校は同じでも在学期間は重ならない。従ってこれらの学校での接点は考えにくい<sup>23</sup>。ならば YMCA の方はどうか。筆者は、前述の、旧制五高以来の伝統を有する熊本大学の YMCA 組織「花陵会」や旧制三高および京都帝大以来の伝統を有する京都大学の YMCA 組織「地塩会」などに連絡を取ってみたが、やはり詳しいことは分からなかった<sup>24</sup>。

條と斉藤の接点はどこか。考えあぐねたまま訪ねたのが「五高記念館」であった。

- 22 『西南学院七十年史』上巻、268頁。
- 23 條と斉藤とは、條が5歳年上であるが、就学年齢の違いなどがあって、五高、東京 帝大の入学は、それぞれ4年の違いになっている。いずれにしても在学期間は重な らない。
- 24 熊本大学の「花陵会」および京都大学の「地塩会」は、いずれも歴史的な価値を持つ会館と学生寮を有しながら学生諸君によって運営されているが、筆者の突然の問い合わせに対しても、快く対応していただいた。さらに京都大学の「地塩会」からは、同会発行の書籍、小冊子などを送っていただいた。特にその中の『地塩洛水 ― 京都大学 YMCA 百年史』には、明治から大正、昭和にかけての三高・京大 YMCA の活動が興味深く記されているが、残念ながら條に関する記述はなかった。同書にも記されていたことであるが、当時は YMCA に所属していない学生信徒も多数いたようで、條もそんな一人であったようだ。

そこで前述の研究員の藤本氏と歓談中、同氏から示唆を受けたのが、二人がいずれも教師として働くこととなった熊本のことである。出身校やYMCAが接点でないとすれば、ともに働きの場を与えられた熊本の地、あるいは熊本の教会しかないのではないか、と仰るのである。実際考えてみると、斉藤が大学を卒業し、五高の教師(講師)となるのが、1911(明治44)年のこと、條が玉名中学の教師となるのが、1912(明治45)年のことであり、時間的には熊本が、熊本の教会が二人の接点となった可能性は高い。そして二人ともバプテストの会員ということであれば、斉藤とは関係の深い「熊本バプテスト教会」が、二人を結びつけた可能性が高いということになる。

「熊本バプテスト (浸礼) 教会」は、九州では、門司 (1893 〈明治 26〉年)福岡 (1901 〈明治 34〉年)に続き、3番目 (1902 〈明治 35〉年)に教会が組織され、1905 (明治 38)年には、日本における南部バプテスト最初の新教会堂を建設したという歴史と伝統を有する教会である。教会組織以前から熊本で伝道活動を行い、同教会の基礎を築いた宣教師、W.H.クラークは、ドージャーとともに、後に「西南学院」として結実する男子中学校の設立を提唱した人であり、その夫人ルシールは、後に「西南女学院」として結実する女学校の設立を中心となって提唱した人であった。また、すでに紹介したように、五高の学生時代から、クラークの薫陶を受けたのが斉藤惣一であった。そういう意味でも、西南とは非常に深い関係にある教会だと言える。筆者はさっそく「熊本バプテスト教会」に連絡を取ることにした。

#### ところが ―

「熊本バプテスト教会」が「無い」のである。ネットで検索しても、電話番号案内に照会しても、出てこない。クリスチャンの先輩教師や同僚教師に尋ねても、はっきりしたことは分からない。そこで、何か手がかりがつかめるかもしれないと思い、名前は違うが、熊本市内の2つのバプテスト系の教会に連絡を取ってみることにした。2つの教会とは、「熊本愛泉教会」と「東熊本バプテスト教会」である。

「熊本愛泉教会」では、濱田修三牧師が丁寧に応対してくださった。事情を話してお尋ねしたところ、何と、その「熊本愛泉教会」こそが、「熊本パプテスト教会」の後身だったのである。いや、正確に言うと、後身の一つ、と言うべきかもしれない。その後、濱田師から送っていただいた「資料」によれば「熊本パプテスト教会」は、1960(昭和35)年、その水前寺伝道所に「株分け」して一部の教会員が移動、翌年誕生したのが「東熊本パプテスト教会」であり、残った本体も1963(昭和38)年、「熊本新生教会」と改称、さらに1973(昭和48)年、その前年に誕生したばかりの「愛泉教会」と合併し、「熊本愛泉教会」となった。さらに、熊本市の中心部、南坪井町(現中央区南坪井町)にあった由緒ある教会も、1978(昭和53)年、郊外の谷草崎町(現西区谷

尾崎町)に新会堂を新築して移転し、現在に至るまで活動を続けているということであった。



熊本バプテスト教会 (年代は不詳だが、竣工当時の写真と思われる)

條の教籍が確認できる名簿などが残されていないか、期待をしたが、濱田師によれば、古い資料などは残されておらず、残念ながら昔のことは分からないということであった。ただ、何かの参考になれば、ということで送っていただくことになったのが前記の「資料」、すなわち「熊本バプテスト教会」・「熊本新生教会」・「熊本愛泉教会」の宣教百年記念誌『神は愛なり』(日本バプテスト熊本愛泉教会 2002)であった。同書が届くまでの間、念のために「東熊本バプテスト教会」にも連絡を取ってみたが、やはり古い資料は残されていないとのことであった。

その後届いた同書には日本におけるバプテスト草創期のことを知る上で貴重なことが多く記されており、前述の『日本バプテスト連盟史 (一八八九~一九五九年)』の内容を補完する部分もあって、興味深く拝見させていただいた。実は、クラーク宣教師夫婦のことをはじめ、「熊本バプテスト教会」に関する本項の記述も、同書によるところが大きいのである。

#### ところで 一

同書の中の大正時代の記述を眺めていたときのことである。突然、「條猪之彦」の名前が筆者の目に飛び込んできた。まさしく、何の前触れもなく、目の前に現われたのである。濱田師からは、條に関することは分からない、と連絡を受けており、全く期

待をしていなかったので驚いた。そこにはこう書かれていた。

「また 1916 年(大正 5 年) 2 月には、熊本教会出身の條猪之彦氏が、西南学院の 初代院長となられた。ただし体調がすぐれず、同年 7 月には院長を退かれた。」(同書 33 頁)

おそらく、これが條と熊本バプテスト教会との関係を示す唯一のものではないだろうか。教籍記録など原資料が残されていないのが残念であるが、熊本バプテスト教会の歴史の中に、條のことが刻まれていたことは間違いなさそうである。條と斉藤はやはり「熊本バプテスト教会で出会っていた」のであった。いずれにしても、これでドージャーと斉藤、そして條との関係が明らかになったわけである。

# (4) 西南学院院長としての働き

1915 (大正 4) 年 12 月 13 日発行の「官報」第一○一○号に「熊本県立玉名中学校教諭」(傍線筆者)であった條の、依願免職 (12 月 11 日付)の記事が掲載されている。新年度からの西南学院の創立に備えて、早めに退職したのであろう。ただ、條の院長としての在職期間については、「略年表」や、前項の『神は愛なり』では、院長への就任が 1916 (大正 5) 年 2 月、辞任は同 7 月 1 日となっているが、『西南学院七十年史・下巻』所載の「退職者一覧表」では、1916 (大正 5)年 4 月から 11 月までということになっており、その他の資料を含めて学院の記述は一定していない。正式の院長就任は 4 月であろうが、実際はその前後に準備期間などがあったために多少の混乱が生じたのであろうと思われる。いずれにしても、その在職期間は 6 ~ 7 か月という短いものであった。

條の院長としての働きについては、おそらくドージャーが書いた一文「西南学院 15 周年記念に寄せて」(『日本の C.K.ドージャー・西南の創立者』  $56\sim59$  頁)が最も詳しいものだと思われる $^{25}$ 。

「…校長の給与の月 100 円を除けば、一番高い先生の給与は月 60 円でした。… (中略) …私たちは選ばれた校長といっしょに、福岡県に学校開設を申請しなが ら、教員の採用にかかりました。條氏は教員採用を一番心配しておられました。

<sup>25 『</sup>日本の C.K.ドージャー・西南の創立者』(原題 Charles Kelsey Dozier of Japan: A Builder of Schools、モード・アデリア・ドージャー著、瀬戸毅義訳、2002) は、ドージャー夫人による C.K.ドージャーの伝記で、表題作の他、「追補」として、「西南学院15 周年記念に寄せて」の一文が収録されている。(翻訳および出版者の瀬戸毅義氏は、元西南学院中学校、高等学校の聖書科教諭)

福岡県への学校開設の申請に関して、当時福岡バプテスト夜間学校で教えておられた川勝教授(筆者注「教諭」のことか?原著では"Prof.T.Kawakatsu")が貴重な働きをしました。また、修猷館の学生部長(筆者注「校長」のことか?原著では"The dean of Shuyukan")が折りにかなった助言をくださり大きな恵みでした。

ところが、1916年1月、選任されたばかりの條氏が病気であり、3ヶ月入院すればまた校長としての責務を果たし得るという確信があるので、医者が津屋崎にある病院への入院を勧めているとの報告を受けました。教員について相談するために、川勝教授と私は幾度も津屋崎に條氏を訪ねました。市と県の関係者のために解決しなければならない多くの問題が浮上してきました。

1916年2月15日、福岡県知事から西南学院設立の認可が下りました。とかくする中に、條校長の助けを得ながら9人の教師を選任し、西南学院を4月に開校する準備が整いました。その当時から本校におられる先生は、今となっては古澤教授お一人です。

105人(筆者注:入学許可は105人だが、実際の入学者は104人)の入学が認められ、4月11日、西南学院の開校式を行いました。條校長も開校式に出席することができて、全てがスムーズに進みました。(中略)

しかし、病が襲ってくるのも物事の常であります。この生まれたての赤ん坊には、慎重な保育を要したのですが、條校長のご健康は、回復する代わりに悪化するという衝撃が待っていました。春の学期期間中、<u>條校長が学校におられたのはたった3回でした</u>。7月にはご退職になり、学校管理の経験がまったく無い私から去っていかれました。

創立委員会は直ぐに、條校長の後任に相応しい人を探し始めました。委員会は 東京帝大卒の4人の方に話を進めました。(中略)

1917年2月、適切な日本人の校長を見つけるという試みが何度も失敗し、私が校長に選ばれ、1929年7月まで校長を務めたのでございます。(以下略)」(傍線筆者)<sup>26</sup>

給与をはじめとして條の西南学院創立に際しての働きがうかがわれる内容である。 その給与については、おそらく玉名中学赴任の際のものと思われるが、1911 (明治 45) 年4月23日発行の「官報」第八六五〇号に「九級俸下賜 但当分年俸八百四拾円 下賜」と書かれている。「八百四拾円」は月給に換算すれば70円ということになるが、 「当分」という表現からすれば「九級俸」はもう少し高給だったと思われるので、給 与面では公立学校当時と同等以上のものを得ていたのであろう。

肝心の院長としての働きは、條が「一番心配して」いたのが「教員採用」であり、また、そのことが、「学校管理の経験がまったく無い」ドージャーにとって、「日本人の校長」を必要とした大きな理由の一つだったのではないか。「修猷館の学生部長」も 創立に際し、助言を与えていたというのも興味深いことである。

創立後の勤務状況については、「條校長が学校におられたのはたった3回でした」ということばに象徴的に表現されている。誕生したばかりの学校のこと、自らの病気のこと、條の心中を考えると、おそらく平静ではいられなかったにちがいない。責任を感じつつもその責任を果たすことのできないもどかしさは、いっそう條の心を傷つけただろう。前述の通り、結局、一年も持たずに條は西南を去ることになるのである。

# 6. その後の生活について

その後の條の生活については、これまで全く明らかにされておらず、どのような経過をたどってその生涯を終えたのかについても、全く分かっていなかった。ところが、 條の学生時代のことについて調べていた時にもたらされたのが、「生立から」と題された次の文章である。

きっかけは、京都帝大時代の條についての資料が何か残されていないかどうかを確認するために、京都大学理学部の化学事務室に連絡を取ったことだった。応対していただいた同事務室を通じて同図書室の國府笑子氏から送られてきたのが、その文章だったのである。その文章が掲載されていたのは、「京都化学々士会」の『会報 第五

26 文中、「川勝教授」については、『日本の C. K. ドージャー・西南の創立者」には、「(注4)」として「英語を教えた川勝虎雄のことだと思われる (在任 1916~1931)」と書かれているが、『西南学院七十年史』下巻所収の「退職者一覧表」には、「退職年月日」は、「1920 (大正9) 年 5 月」となっている。また、この文章が書かれた時点 (1931年当時) で、「その当時から本校におられる先生は古澤教授お一人です。」とあるが、同一覧表で確認できる限りでは、創立当時の教員数は、ドージャーを除き 12 人であったが、そのうち 1916 年度中に退職した者は、條を含めて 4 人、17 年度に 1 人、18 年度に 3 人、19 年度に 1 人、20 年度に 2 人と第一回生の卒業を待たずに、「古澤教授」以外の 11 人が退職している。生徒の方も「105 人」と書かれているが、実際に入学手続きをしたのは「104 人」であり、その 104 人のうち、卒業したのはわずか 29人である。教員のみならず生徒の退(転)学も多く、こんなところにも草創期の学校の厳しさがうかがえる。なお、同一覧表によれば、「古澤教授」とは、「古澤正雄」のことで、国語と修身の担当で、1934 (昭和9) 年 3 月まで在職した。

また、條の病気については、ドージャーは本文中では、"ill" (病気) としか表現していないが、ドージャー夫人による伝記の中では "tuberculosis" (結核) と書かれている。

号』(大正9年1月発行)である。「京都化学々士会」とは要するに「京都帝国大学理工科大学化学科」の同窓会組織であり、その同窓会報がすなわち『会報』なのであった。國府氏は筆者からお伝えした條に関する情報を基に同図書室に残された資料の中から條の文章が掲載された『会報 第五号』を探し出してくださったのである。條の辞任後の様子を伝えるものとしては、おそらく唯一のものではないか。いずれにしても貴重なものなので全文を掲載する。

生立から

條猪之彦氏

拝復 会報第五号に小生等の写真及略歴を御記載になりますとか、写真はこの 頃ちつとも写しませんからずつと古いのを一葉御送附申上げます、又履歴につい ては申上げる程のものはありませんがだまって居ては幹事さんがご迷惑と存じ左 に御披露を致します。

生まれたのはその昔熊襲が住んだと云う肥後の国の真ん中です。それから高等学校までは郷里で済まし大学を出たのは何でも(明治)四十三年だつたと思ひます、出ると直ぐに中学校の先生になりました、それから終には福岡市で私立中学校の校長をして居ました、それから病気に罹つて爾来、方々の病院に入院をしたり転地をしたりして殆ど社会と没交渉に日を送る事茲に五年です、只今は天草に転地して専ら静養に務めて居ります、何れ其うち天国へ転籍するつもりで居りますがそしたら好きな果樹園でもひらき尚暇があったら化学の研究所でも設立しようかと思って居ます其時には諸君にもご助力を願う事に致しましょう。

小生の履歴過去、現在、未来に渉ってざっと斯くの通りであります。(傍線筆者、旧字、旧仮名遣いを新字、新仮名遣いに改めた以外は原文のまま)

院長辞任後の條は、この文章が書かれた1920 (大正9)年の時点まで「方々の病院に入院をしたり転地をしたりして」5年の歳月を過ごしたというのである。全文を通して明るい調子で書かれているが、当時において転地療養を必要とするほどの病気(結核一注26参照)であれば、完治する見込も少なく、それが「何れ其うち天国へ転籍するつもりで居ります」という死を覚悟しているような表現を生み出したのであろう。実際、その数年後に條は「天国へ転籍する」ことになるのである。

條の「略年表」によれば、院長辞任の記事に続き、「1927(昭和 2)8月30日 熊本県八代市(?)において逝去する。(46歳)」と書かれているが、この記述が何に基づくものであるかは分からない。逝去の場所とされている「熊本県八代市(?)」についても、果たしてそれが本当のことなのかどうかも分からない。八代とすれば、転地?

療養先かもしれないし、もしかすると、八代は、自宅のあった熊本市の南部、杉島の 間違いかもしれない。條の最後に関して、分からないことばかりであるのは非常に残 念であるが、今後の調査、研究に委ねたいと思う。いずれにしても、條は 46 歳とい う若さで天国へ旅立ったのであった。

# 7. さいごに — 「院長」と「校長(中学部長)」について

筆者はこれまで「西南学院初代院長條緒之彦」について、その生涯をたどってきたわけであるが、最後に考えておきたいのは「院長」という名称の意味とその働きについてである。というのも、我々は條のことを「初代院長」として記憶し、現院長まで続く17人の「院長」の系譜の中で理解をしている。またその考えは、『西南学院七十年史』あるいは『西南学院百年史』の中でも踏襲されて現在に至っている。

しかし、考えてみると、創立当時の「院長」とその後高等学部などが設立されてからの「院長」とでは、同じ「院長」でも、その内容は大きく異なったものである。すなわち、創立当時の「院長」は、「私立中学西南学院」(その後「中学西南学院」)の「院長」、つまり実質的には、條も自らをそう称していたように「私立中学校の校長」である。そして高等学部開設後の「院長」は複数の学校を束ねる、現在と同じ意味での「院長」ということになるわけである。

ではドージャーなどは、この名称についてどう認識していたか。先に引用した「西南学院 15 周年記念に寄せて」の中では、條のことを "Principal Jo"、條に続いて「院長」となった自分のことも "Principal" と記している。また、この手記が収められた「日本の C.K.ドージャー・西南の創立者」の著者であるドージャー夫人は、條が「院長」に選ばれる際の条件を "a man of strong Christian character to serve as principal" (「院長」として働く信仰の強いクリスチャン)と表現し、高等学部の職員室でのドージャーのことも、やはり "the principal" (こちらの翻訳では「校長」)と表現しているが、西南を去る際のドージャーのことは "president of Seinan Gakuin"と表現している。

1921 (大正 10) 年、高等学部の開設に合わせて、新たに財団法人「私立西南学院財団」が設立され、それまでの「中学 西南学院」という名称も「西南学院中学部」と改められ、初代「中学部長」には竹本仲蔵が就任する。『西南学院百年史』資料編 61 頁に掲載されている Annual of the Southern Baptist Convention, Sixty-Sixth Session-Seventy-Sixth Year, 1921 (南部バプテスト 66-76 年次報告) と題された一文の中では、「中学部長」のことは"dean of the middle school departmet"と表現されている。"dean"は、

ドージャーの一文の中で「修猷館の学生部長(校長?)」と訳された部分で用いられていたことばである。

これらのことから考えると、やはり一口に「院長」と言っても、我々は、そう区別せずに使っているが、英語では微妙に違うようである。前述の通り、翻訳者の瀬戸氏も苦労されたのか、"Principal"の訳語として「院長」と「校長」という二つの言葉を充てられている。あるいは、これは、條が短期間で「院長」を辞任してしまったために、生じた問題なのかもしれない。

ここからは全く仮定の話であるが、條がそのまま「院長」を続けることができていたならば、どうなっていただろうか。5年後に高等学部が開設された際に、そのまま中学と高等学部を東ねる「院長」となっていただろうか。筆者はおそらくそうなっていただろうと考えている。というのも、前に引用したドージャーの一文「西南学院15周年記念に寄せて」の中で、創立委員会は、「條校長の後任に相応しい人」として「東京帝大卒の4人」に話を進めたと書かれており、「院長」に「相応しい人」として「帝大」出身者を想定していることから考えても、おそらく創立委員会も高等学部などの開設をはじめとした将来の発展を考えており、そのためにも「帝大卒」の人物を招聘しようとしたのではないかと考えられるからである。また、結果的にドージャーが継続して「院長」を続けることになったことから考えても、條に対しても当然そのような大役が与えられていたのではないだろうか。

條が「院長」を続けていれば、その後の西南の発展の上でも、特にその理科系の方面において、何か変化がもたらされていたかもしれない。「化学科」――すなわち「理系」の出身者が「院長」であれば、当然その後の発展にもそういった意味での大きな影響は出てくるだろう。言うまでもなく西南は「文系」の学園であるが、條がそのまま在職していれば、その後の高等学部(専門学校)や戦後の大学の開設に際し、「理系」方面への発展も考えられていたかもしれない。そう考えると、條の退任はその後の西南の運命を決する大きな出来事だったとも言えるのである。

※本文は、文中に示したとおりたくさんの方々のご協力によって出来上がったものであり、筆者一人の力では到底ここまでたどり着くことはできなかったものであることを改めて申し上げておきたいと思います。お世話になった方々のお名前は、それぞれのお気持ちを尊重し、すべて掲げることは控えましたが、お世話になったすべての方々に対し、大きな感謝の気持ちは伝えさせていただきたいと思います。ありがとうございました。

# 【付記】『西南学院百年史』における時代区分と歴史認識について

今回、本文の執筆、校正を通じて、改めて「西南学院」の創立前後の状況について、調査、確認作業を進めてきたわけだが、その中で気になることがあるので、この機会に一言付け加えておきたい。それは、この文の標題に揚げた「『西南学院百年史』における時代区分と歴史認識について」である。

『西南学院百年史・通史編』」(以下『百年史』」)では、学院創立の年、すなわち 1916 (大正 5) 年「以前」を「第 1 章」とし、「第 2 章」を「創立期の西南学院」として、その時期を【1916 年~1930 年】で区切っている。創立年を中心に前後に分けたわけだが、第一次世界大戦(1914~1918)の途中、しかも日本も大きな影響を受け続けている中で時代を区切るというのは、どう考えても不可解である。やはりここは、第一次世界大戦の始まりであり、時代が大きく展開してゆく「1914 (大正 3 年)」前で区切るべきであったと思う。

また、その「時代背景」についても、「第2章」では、何故か、学院創立後の1917 (大正6)年の「ロシア革命」から説き起こし、「シベリア出兵」や「米騒動」、「植民地朝鮮」の「三・一独立運動」と「弾圧」、「治安維持法」の制定や「張作霖爆殺事件」など、世相の暗黒面を強調するものばかりが並べられ、学院があたかも暗い時代の中で誕生したような印象を与えている。そこで筆者は、これも時代を1916 (大正5)年で区切ったことによる問題かと考え、「第1章」の「時代背景」を確認してみたところ、そこに書かれているのも、「韓国併合」や「大逆事件」、「シーメンス事件」や「山東半島のドイツ植民地占領」、中国に対する「二十一カ条の要求」など、やはり時代の暗黒面と負の側面を強調するものばかりである。この「暗黒面ばかりを強調する一面的な見方」が果たして本当に正しい歴史の見方と言えるだろうか。当時の社会を「素直」に眺めれば、もっと別の側面もたくさん出てくるはずである。実際、1916 (大正5)年前後の様子を、当時の新聞等で確認してみると、「百年史」の記述からはとても想像できない社会のさまざまな様子が見えてくる。そもそも、不景気な暗い世相の中では、学校を設立するための寄付金なども集まるはずはなく、新しい学校など生まれるはずもないのではないか。

筆者は以前、明治末期から大正、昭和前期にかけての新聞(「福岡日々新聞」、「九州日報」等)を、時間をかけてかなり丹念に調べたことがあるが、その経験を通して言えることは、大正時代、特に第一次世界大戦の時期は、日本全体が好景気につつまれていた「大正バブル」の時期であり、特に福岡にとって「大正5年」は、やや大げさな言い方かもしれないが、そのような好景気を背景にした「空前絶後の『熱気』に満たされていた年」ということである。というのも、この年、福岡では7月に、杉山茂

丸による一大プロジェクト「博多湾大築港計画」が始動、また11月には、国家的一大行事である「陸軍特別大演習」が開催されるなど、福岡にとっては画期的な年であった。ただ、良いことばかりではなく、6月には「市政刷新会騒擾事件」や「博多毎日新聞社襲撃事件」など、多数の市民を巻き込んだ「暴動」も起きたが、それも見方を変えれば、当時の「熱気」を象徴する出来事だと言えるだろう。「西南学院」は、そのような「好景気」と「熱気」とを背景にして誕生したのであって、不景気な暗い世相を背景として誕生したのではないのである。

筆者も『百年史』の執筆者の一人として、『百年史』の刊行以来、違和感を感じていたことなので、この機会をお借りして一言付け加えさせていただいた次第である。

# 日本における学生会館の生い立ちと西南会館建設について

大杉 晋介

黒いハードカバーで製本された「関西学生会館懇談会研究集会報告書」が2冊、西南会館事務室の書架に納められていた。通常の業務中にはなかなか読めない厚い冊子であったが、2020年に新型コロナウイルス感染症のため在宅勤務の時期があり、2冊とも丁寧に読んで概要をまとめることができた。

また、この報告書に続き、同じく西南会館事務室内に保管されていた西南会館建設 に係る記録(「学生会館建築委員会記録」、「部長会議と学館建設委員会との合同会議 記録」、「西南会館交渉委員会記録」)も読み込んで概要をまとめることができた。

以上の概要まとめは、学生部長宛てに報告し、学生課内でも共有してもらった。

関西学生会館懇談会研究集会は、「大学における新しい学生会館の重要性にかんがみ、学生会館の諸問題について研究・懇談し、理解と認識を深めること」を目的にしており、当初、関西以西の国公私立大学22校が加盟し、本学は第17回から参加している。この研究集会報告書は、第1回[1963(昭和38)年12月19日]から第28回[1978(昭和53)年1月27日]まで収録されており、特に第23回[1975(昭和50)年6月23日~6月25日]は九州・関西合同研究集会として、本学を会場に開催され、当時の船越学長、唐木田学生部長も参加されている。また、この研究集会では、本学の西南会館の建設の経緯、その後の管理・運営のことが当時の責任者から報告されており、本学院の学院史としても貴重な資料と言える。さらに、この研究集会報告書は、講演、報告、討議の内容を録音し、文字起こしされているので、当時の状況が臨場感をもって把握することができた。「学生会館建築委員会記録」等については、建設経緯、学生との協議、学生会館の名称など、具体的な状況を知る手がかりとなった。

# 1. アメリカの「ユニオン」を参考に学生会館を設置

戦後、新制大学になってから、様々なものがアメリカからもたらされたが、その中の一つが学生会館や厚生補導の考え方であった。第6回〔1966(昭和41)年12月16

日〕の討議の基本的視点として、次のように述べられている。

戦後、新制大学が発足し、専門的学術の研究のみならず教育面における一般教育及び課外教育が重要であることが認識され、課外教育の一環として課外活動が重要であるという基本原則が確認された。同時に、SPS 理念(『学生厚生補導』『学生助育』)とその方法論が導入され、いわゆる新しい学生部業務の重要な分野として課外活動の援助指導ということが自他ともに強調され、今日に及んでいる。

日本の学生会館のモデルになったのはアメリカの「ユニオン」であり、1958(昭和33)年に文部技官であった西田亀久夫氏がアメリカから持ち帰り、「国立大学学生会館設置計画要項」に示された。

そもそもアメリカの「ユニオン」の始まりはイギリスであり、イギリスの場合は Debating Society が先に存在しており、その活動に必要なために会館が造られたと考えられている。アメリカの「ユニオン」の理念としては、大学の教育計画の一環として、文化的、社会的プログラムを提供することによって、学生の自由な、自主的な活動を奨励して、自己実現の機会を与え、社会人としての個人、市民性の育成、人間性の発展を求めるというものであった。

同志社大学会館事務室の傍士明英氏は、第9回研究集会〔1968(昭和43)年7月1日〕において、次のように述べている。

日本の文部省、大学当局の考えている学生会館というものは、ポイントだけ申しますと、これは、昭和34年に出ました『国立大学学生会館設置計画要項』に基づくわけです。これには柱が三つありまして、一つが人間形成の場、つまり人間的な接触の場であるという考え方。二番目が課外活動の中心であるという考え方。三番目が福利厚生の施設であるという、この三つが柱になっている。

以上のとおり、アメリカの「ユニオン」をお手本とし、日本の学生会館を「ユニオン」的なものにしたいと考えていたことがこの報告書から読み取れるが、大学がプログラムを作成することはなかなか難しく、結局は学生会館という建物だけを取り入れた形になった。このことについて、前広島大学学生部長で文部省初等中等教育局視学官の浅川淑彦氏は、講演の中で次のように述べている。〔第14回研究集会:1971(昭和46)年1月13日〕

日本には戦後アメリカの厚生補導に関するいろんな洗脳がありまして、しきりにアメリカの制度を取り入れてまいりました。そこに大きな問題があると思います。というのはユニオンにしても、ユニオンのビルディングを輸入した、学生会館という建物を輸入したことにおいてまずまずよかったと思うのです。

ものごとの文化・過去の伝統・歴史・地盤・背景・社会的な背景、そういうものから変えようとする、そういうものにからんだものを輸入すると間違いがおこるということです。…そういうことに係りのないビルディングだけを日本が取り入れたことはまず成功であった。

# 2. 学生会館と学生運動

学生会館の考え方の変遷については、第26回研究集会〔1977(昭和52)年1月14日〕の分団討議の中で、次のように述べられている。

昭和33年頃から文部省で研究していましたが、その当時の考え方は、学生会館設置計画要項にもありますように、会館とはそこで人間が互いに楽しく語り、過ごす施設 — 学生のためだけの施設ではなく、全大学人が交流する場である — という考え方を基盤とし、従ってそこでクラブ閉鎖主義の壁を打ち破ろうというのが主眼だったのです。ところが、60年安保改定期の頃から学生の自治意識の高揚と対権力の構想とが交じり合って、学生会館は学生のための施設というよりは学生の占有すべき施設であるという実態に変わってきました。

学生運動と学生会館は非常に深い関係にあるが、関西と関東では違っていたということを、第14回研究集会〔1971(昭和46)年1月13日〕の全体討議において、法政大学の河原一郎氏(学生会館委員会副議長、設計者、工学部教授)が、次のように述べている。

印象的なのは、関東の学生会館の場合にはほとんど全部の学生会館が砦的な作用を果たしてきたのに対して、関西の学生会館は大学紛争の最中でも学生会館だけは中立地帯として残されていたことが、そして学生たちの話し合いの場所になっていたことが印象的でしたね。

本学の「西南会館」は、授業料改定の時に学生会館を建設することを約束して、1971 (昭和 46)年 11 月に完成している。この学生会館建設に関しては、1970(昭和 45)年 12 月に学生会館建築説明会で乱闘事件があり、1971(昭和 46)年 2 月には学生会館の自主管理を主張して建築現場に座り込んだ学生に対して機動隊を導入している。(『西南学院百年史』)

第23回研究集会〔1975(昭和50)年6月23日~25日〕は、九州・関西合同で本学を会場として開催されている。そこで、船越栄一学長は開会挨拶の中で、西南会館の建設、管理・運営について、次のように述べている。また、この学長挨拶から、当時は教育施設及び課外活動施設に力を入れていたことが分かる。

私どもの大学で学生会館のことを「西南会館」と呼んでおりますが、その「西南会館」をつくりましたのは昭和46年の秋でございました。その直前には九州では最初の火炎ビンが飛ぶというような経験がございますけれども、この建設にかかりました時に各大学から、昭和46年で大学紛争の非常にうるさい時でございまして、「そんな紛争の種になるようなことはおやめになっては」と忠告を受けたこともありますが、私は昭和43年に授業料を改定いたしました時に、学生会館を建てると約束をいたしました。学生諸君と約束したことは必ず守るということで、私は昭和46年に学生会館を建てました。そして、その管理も大学が責任をもって行うという方針を堅持しました。

しかし、その建設の過程におきましてずいぶんいろいろな妨害や、さっき申しました火炎ビンが飛ぶということがございましたが、とにかくそれを乗り切りまして現在では非常にうまく管理が行われております。建物の管理はできるだけ立派にしたいという方針で私は臨んでおります。

隣の図書館は国連の指定図書館になっており、国連の一切の刊行物をそろえております。国連図書館が全国で11 ございますけど、おそらく私立大学では西南一校だけと思います。また、コンピューターもハイタック8300 という文科系としては立派なものを備えています。体育館も総合体育館としては西日本一だと言われております。どうぞ折角の機会でございますので、研修会の後、私どもの大学の施設も十分ご覧いただけますようにお願いいたします。

本学の西南会館と学生運動の概要については『西南学院百年史』に掲載されているが、第25回研究集会〔1976(昭和51)年6月28日〕の全体討議の中で、西南会館事務室の柴戸直善氏は、当時の紛争の原因のひとつとして、次のとおり述べている。

その1つに防災問題というものを引っ掛けてまいりまして、会館をオープンしてから5年経過しておりますけれども、一度も防火訓練をやっていないということ。それから、学生問題も昭和46年頃はまだうちの中核派が盛んにやっておりましたので、非常出入口を施錠していたという慣習から、現在もそれをやっておりますけれども、事故発生時にそこがどうなるかということで、ようするに現在も施錠したままで通常開館しておったものですから、そういう指摘があったということ。もう一つ暖房機のボイラーが故障しているのになおかつ会館のボイラーの運転を続行した、というようなことを今年の4月中旬から問題として取り上げまして、現在続行中です。

# 3. 学生会館の位置づけ

第6回研究集会 [1966(昭和41)年12月16日]では、「課外活動における学生会館の位置づけ」をテーマに討議されている。討議の基本的視点として「学生会館問題を考える場合に、それは単に学生会館当事者段階のみの問題ではなく、実は大学教育における課外活動のとらえ方、あり方と密接なかかわりをもった重要な問題であることに気づかざるをえない」としている。そして、会館が独自性を発揮しえないもっとも根本的な理由は、なんといっても、課外活動が大学の教育計画の一環として明確な位置づけがなされていないということが述べられている。

1970(昭和45)年当時、文部省でも課外活動とは何かについてはっきりしたものを出していないし、大学としても大学教育の中での課外活動の位置づけが明確ではないため、学生会館が何のためにあるかということが難しくなっている。

第18回研究集会〔1973(昭和48)年1月22日〕において、法政大学の伊藤武夫氏 (学生部学生会館担当) は学生会館について次のように指摘している。

戦後の教育論が正課中心主義教育観から、学生の生活のあるところを教育の場と考える教育観に移行し、学生の課外の活動が大学教育のもとめる学生の知的、人格的発達に資することが評価されたために、学生会館が単なる課外活動の場、とりわけサークル活動のセンターの場として定着しているところに問題がある。さらに、学生会館は「単なる建物ではなく、ひとつの組織であり、活動である」にもかかわらず、前述のように「単なる場」としてとらえられ、建物や施設をつくることが先行して、その活動や活動をするための組織としてとらえられてこなかったところにも重大な問題がある。

第二に、施設の側面からながめると、財政や敷地の規模などの問題が基本にあるが、各種サークルなどが専用の個室をもとめるということもあって、小さな部屋のかたまりとして部室施設のしめるウエイトが非常に高く、共用施設の範囲がかなり限定されているという問題と、さらには、共用施設においては、施設おのおのが多面的、有機的、機能的に使えるよう配慮されているところは少ないという問題がある。

本学の西南会館の場合、生協、部室 (建設当時で約70)、共用施設 (会議室、集会場等) が一緒になっているが、第20回研究集会 [1974(昭和49)年1月23日] において、西南会館の今村恒登志事務室長は次のように述べている。

当初の目的は学生の課外活動と学生教職員の親睦の場ということで設けられたわけですが、2年経ってみると部室と会館部門が一緒になっているために、サークル会館的になってしまっています。それを一般学生もフルに使用できるような体制にもっていくにはどのようにすればいいかと検討する時期にきているのではないかと思っています。

# 4. 西南会館の建設の経緯と管理運営

本学で開催された第23回研究集会 [1975(昭和50)年6月23日~25日] において、当時の西南会館の今村恒登志事務室長が「主として会館設定までの経緯について」というテーマで研究発表している。本学の会館建設の経緯を知るために重要と思われるので、少し長くなるが、研究発表の一部を引用する。

# 【研究発表「主として会館設定までの経緯について|】

本学会館は、昭和 46 年 11 月に完成しました。名称を「西南会館」と申しますが、これが完成時までは仮称「学生会館」として建設が進められてきました。しかし、完成当時の一般的な情況から「学生」の名称を付することは好ましくないとし、最終的には「西南会館」とすることになったわけで、本学会館は昭和 47 年 1 月 8 日開館し今日に至っておりますが、その設立の過程におきましては、一部活動家の学生、生活協同組合組織部(学生)などが建設に反対し、種々のトラブルが発生したため、完成予定を大幅に経過しながら前記年月に完成しました。

昭和 42 年 12 月に大学が公表した「昭和 42 年度新入生学費改訂ならびに第一

次財政計画(昭和42年度~47年度)の施設拡充計画」によりますと、学生会館を昭和45年度に新築することが提示されております。当時、本学におきましては、学部、学科等の増設に伴いまして学生数が急増したため従来の施設でこれを十分に補うことが不可能になり、以上のような大学の基本方針が打ち出されたわけであります。

当時の学生の課外活動施設をとってみると旧寮の建物を使用したり、あるいは教室の一部を利用したりして十分にその活動を発揮することができないのは勿論、教室を使用するため一方では学内の騒音などの問題も生じ、いよいよ学生会館の必要性が論じられるようになってきておりました。このような情況を反映して「学術文化会総務委員会」は、当時の院長でありました故 E.B.ドージャー先生に対し、学生会館の建設について要望すると共に下記のように確約書を取り交わしております。その結果、学文総務委員会は、学生会館の建設について足がかりを得たわけです。

しかしながら、当時、全国的な規模で吹き荒れていた学園紛争は、本学にも例外なく押し寄せ、一部の過激的な学生の活動が横行していて、授業料値上げに対する反対行動は彼等の好材料として最もよく利用したように思われます。そのために会館建設の着工は大幅に遅れをきたし、その間に建設資材の昂騰なども加わり、大学は会館建設に早急にとりかかる必要から「学費改訂と大学の将来について」という広報を発行して学生一般に対し協力を求めることになったのです。それは、次の3項に要約されます。

- ①キリスト教主義の学校として、その存在の意義を明らかにする。
- ②学部の充実、ゼミ指導体制の強化と必要不可欠の教育施設の早期実現によって教育の質的向上をはかる。
- ③財政上の問題として体育館・学生会館などの教育施設実現のため。 として、これを学生に配布した。

このようなことの続くうち当初、院長との間に確約書を取り交わした学文総務 委は昭和44年10月、学生会館建設を促進するため「学生会館建築小委員会」を 設立し、再度学生部長に対し学生会館に関する大学側の青写真を提示するよう文 書でもって要望しております。これによりますと、当小委員会で独自に学館の青 写真を検討しているが、学校案に示されている建築案でどの程度の施設を考慮さ れているか分かりかねるとして学校側の青写真の提示を求めてきたわけです。

これに対し、大学側は翌年3月になり初めての「学館建築委員会」を開催し、 これまでに提出された諸要望に対して検討されたわけです。その手がかりとして、 まず関東及び関西地区大学の学生会館を視察することにより、今後学生会館を建 設するための資料としました。

このあと、当委員会は学館完成までの間 20 数回の会合を持ちました。 建築委員会で協議された事項(概要)

- (1) 昭和 45 年 3 月 30 日、第 1 回建築委員会が開催され、学館の規模及び基本的 な方針について協議される。
- (2) 学館施設の概要について、会館の施設は、(イ) 会館部門、(ロ) 厚生部門、 (ハ) 部室部門に大別する。
- (3) 学館設計図を新聞会・代議員会・生協・学文会・体育会の諸団体に配布する。
- (4) 学館設計変更について、学文会から提出された要望書にもとづき大学側から 概要説明がなされる。また、生協関係の設備のため約 100 坪の建物を建築 する。
- (5) 今後の問題点として、生協から要望された生協の学内供給施設一元化について検討される。

生協は先に学館の大学案に対して次のような意見書を大学に提出した。

- ①今回、大学より提示された学館の青写真は、そのほとんどをサークル部室に費やし、会議室、談話室及び食堂などは若干の色取りを添える領域を脱していない。学館は、全学生を基盤とした学生自治の場として位置づけられなければならない。学館を中心とした自治活動は、その施設の保証によって実現され、諸施設の充実は自治活動によって内容を整えるものとする基本的方向を示す。われわれは、この機会に全体的な学館像の中から食堂をはじめとする生協施設の一元化を実現させたい。そして、西南生協は学内厚生福利を一手に引き受けて組合員生活防衛の砦として学内のすべての供給を一元化して組合員の結集を強化し、生協の機能を発揮し、これを学内はもちろん学外に及ぼし、教育とのかかわりを密にし、購買部の利用を積極的に勧めたい。
- ② (略)
- ③ (略)
- (6) 建築案の数次にわたる変更による建築規模は次のとおり。 (略)
- (7) 学館建築について、学生に対する説明会を開催する。 生協との間に協議会を持つ。また、学生の代表機関が存在しないので学文 会・体育会との間に協議会を持つ。

- (8) 部長会議と学館建築委の合同会議開催。
- (9) 学館建築反対について、学生の意見を総合すると、次の3項に要約できる。
  - ①部室が多すぎる。
  - ②管理権は学生が持つべきである。
  - ③学生の学館設置準備委員会(仮称)を代表機関として認めよ。
- (10) 起工式(昭和46年3月5日)を挙行する。
- (11) (略)
- (12) 管理・使用規程について

学生の課外における活動は、自主的活動を通じて社会性の発展を助長することにあるから、学生の自治活動の場としての学館の使用にあたっては、従来どおりできるだけ学生の自主性を尊重し、参加を認めていくべきだと思う。しかし、学館については、他の施設と同じく管理責任は最終的に大学が負わなければならない。

以上のような経過をたどって、本学会館は昭和47年1月開館したわけですが、会館の管理・運営は前述の学長声明の主旨に沿い作成された会館規程・使用細則に基づいています。即ち、部室は各クラブの責任において自主的に管理される。また、生協は会館1階の食堂を含め売店棟については管理のすべてを委託する。これは、学校法人西南学院と生協との間に締結された施設貸与契約に基づいて細部にわたり取り決めがなされております。その他、理髪部門、ヨルダン社(キリスト教関係図書等販売)が同じく会館に移り営業しておりますが、これも学校法人との間に単独の契約を結び契約の範囲において独自に管理使用しております。したがいまして、会館事務室は、これらを含めた建物全体に及ぶ管理を行いますが、個々の契約内容については契約主体であります学校法人が直接担当することになっております。(筆者により一部修正)

学生会館に関する学文委と院長との確約書〈43・1・23〉

西南学院院長 E・B・ドージャー

学術文化会総務委員長殿

答 口

大学学生会館建設について照会を受けたので左記のとおり新築することを 確約します。

一. 大学学生会館

イ. 建築面積 延約 3.967m<sup>2</sup>

ロ. 構造 鉄筋コンクリート造り(3階建の予定)

ハ. 建築用地 西新校地内

二. 総工事費 1億4,400万円

以上が今村恒登志氏の研究発表の概要である。

次に、西南会館建設について、「学生会館建築委員会 | 及び「部長会議と学館建設委 **員会との合同会議** | の記録から、学生側の意見・要望と学校側の考えをまとめると、 次のとおりである。

# 【学生側の主な意見、要望】

- (1) 学文会は、一般学生のための学館として考えているが、生協とは根本的に意見 が違う。
- (2) 1970(昭和 45)年11月9日付け、学生側は、「学生会館=サークル会館 | 構想に 関しての公開質問状(立看板)を出す。

主なポイントは次のとおりである。

- ①部室を会館内につくることについて
- ②管理運営の問題について
- (3) 1970(昭和 45)年 12 月 16 日(水)の学生会館についての学生への説明会の前々 日及び前日には、20~30名が学内においてデモを行ったり、4回程度ビラを配 布し、相当数の立看板を出している。その内容は、学館の主体は学生にあるこ と、大学案はサークル会館だとして大学案反対の線を打ち出している。

#### 【学校側の主な考え】

- (1) 課外活動関係の部室、会議室等はすべて学生会館にもっていく。
- (2) 全学生を対象とした学生会館であるので、基本的な目的・意味を作成する。

- (3) 1970(昭和 45)年12月16日(水)ランキン・チャペルにおいて、全学生対象の学生会館建築に関する説明懇談会を開催する。 [12月1日の部長会議で決定] この説明懇談会については、大学側は部長会議と学館建設委員会との合同会議を開催して、開催方法、担当者、対応など慎重に協議した。なお、『西南学院百年史』によると、説明会当日、乱闘事件が起きている。
- (4) 本工事契約内容

[1971(昭和46)年4月30日(金) 第14回学生会館建築委員会]

- ①本館工事費 21,356 万円 (C 案より 18 坪増加) 坪当り単価 130,497 円 最終設計より 77 坪増加
- ②別棟工事 (プレハブ、生協使用) 100 坪 1,000 万円
- ③設計費 600万円 合計 22,950万円

増加分内訳 厨房 約15坪 食堂南側テラス 約11坪

音楽練習場 約 49 坪 焼却場 約 2 坪

続いて、管理規程、使用規程制定について、「西南会館交渉委員会」の記録からポイントをまとめると次のとおりである。

- (1) 一般学生からの意見聴取方法については、意見箱を学生部、教務部、図書館窓口に置き、意見を聴取する。〔第5回西南会館交渉委員会:1971(昭和46)年11月22日(月)〕
- (2) 学文会代表は、幹事会で決定した要望事項を説明し、それに対し、遠山学生部 長は次のとおり回答した。〔第7回西南会館交渉委員会:1971(昭和46)年12月 13日(月)〕
  - ①委員会の構成人員について

学校側が委員として加えた理由は、広い意味での組織体の代表として自治会、 学文会、体育会、ゼミ連を加えている。新聞会、応援指導部、レクレーション研究会は一種のクラブと考えているので、委員会の構成メンバーに加えることはできない。また、委員の人数が学校側の方が多い理由は、学校側と同数になった場合、管理の機能が果たせないことも起こり得るので同数にする ことはできない。委員の人数は15名程度が適当と思われる。学文会2、体育会2、自治会2、ゼミ連1に増員する。

- ②委員会の開催要求について 委員の要求があれば、開催できるようにする。
- ③学長が管理するのは当然であり、委員会が管理することはできない。
- ④課外活動を自治活動に変更することについて 自治活動となると範囲が狭くなる。課外活動は、自治活動を含む課外すべて であるので、変更する必要はない。
- (3) 体育会からの要望について

開館時間を午前8時から午後10時までに延長することについては、会館の管理上延長することはできない。しかし、体育館の開館時間とも関連性があるので、9時30分まで延長することに決定する。これについて、体育会は了承した。

# 5. 学生会館の名称

学生会館の名称については、学生運動との関係もあり、各大学とも頭を悩ませていることの一つである。第12回研究集会〔1969(昭和44)年12月19日〕において、次のように述べられている。

「学生会館」という名前ですが、学生はいつも「学生会館」だから学生のものだという。[……] 先生や職員は従であり、使ってもかまわないが運営は学生の手でやるべきだと、「学生会館」という名前にすごくとらわれる。学生会館は学生だけのものではなくて大学全部のものであるはずです。ですからやはり、「学生会館」という名前は「大学会館」と変えた方がいいと思います。

本学の場合は、第16回学生会館建築委員会〔1971(昭和46)年6月28日(月)〕の記録に次のように記載されている。

1971(昭和46)年6月1日の委員会において検討された2つの名称(ドージャーホール、大学会館)を部長会議に提案したところ、一般の先生方にアンケートをとることになった。6月25日に締め切り、アンケートを集計したところ、次の結果になった。



竣工当時の西南会館

①Dozier Hall (ドージャーホール)	20 票
②大学会館	3票
③学生会館	3票
④西南会館	1票
⑤Seinan Hall	1票
<b>6</b> Union Building	1票
⑦ (ドージャー会館)	(1票)

アンケートの結果、「ドージャーホール」が絶対多数であるので、「ドージャーホール」に決定し、次回の部長会議に報告する。

なお、「ドージャーホール」と名付けることについて、ドージャー先生の気持ち を汲む必要があるため、ドージャー夫人と相談した方がよいとの意見があった。

最終的には、「西南会館」となったことが『西南学院百年史』に次のように記載されている。

建設に当たっては、自主管理権を主張する一部の学生との対立はあったものの、会館は、1971(昭和 46)年11月に完成し、「西南会館」<sup>1</sup>と命名した。これは、学生だけでなく、教職員との共同使用という観点から、理事会が決定したものである。

<sup>1</sup> 体育館の名称案も「ドージャー・ホール」であった。

1962(昭和 37)年 12 月 15 日発行の『西南スポーツ』において、中島前体育総務委員長は「『ドージャーホール』の設立を目指して — 全学生の団結を — 」というテーマで、次のとおり記載している。

去る10月下旬、委員会有志で、体育館の仮称「ドージャー・ホール」について、E.B.ドージャー先生宅を訪問し、先生の快諾を得、先生御自身も体育館設立に賛同の意を示され、今後の協力を約束してくださった。この事は、今後この運動を続けるにあたり、大きな西南スピリットたるべきものが挿入されたことになるのではないだろうか。西南の創立者たるC.K.ドージャー先生を記念して、体育館の名称を「ドージャー・ホール」とし、全学を挙げてその設立に邁進できる対象を得たことになる。「ドージャー・ホール」はスポーツを通じ、建学の精神を学び、西南の意義を再認識する大きな館として、我々を無限に指導してくれると確信する。創立後40数年、様々な道を歩き、また今後歩み続けるであろう西南、そこに学ぶすべての者の願いとして、一日も早い「ドージャー・ホール」の設立を願ってやまない。

# 6. 正課外教育に係る近年の動向

この研究集会報告書によると、戦後、アメリカの「ユニオン」を参考に学生会館を設置し、課外活動における学生会館の位置づけ、あるいは大学教育における課外活動の位置づけなどについて検討している。しかし、課外活動が大学教育計画の一環として明確に位置づけされていない状況があった。

近年の動きとしては、次の『大学時報』の記載のとおり、正課外教育が大学の教育 計画の一環として捉えられてきていることが伺える。

2015(平成27)年9月の『大学時報』において、正課教育だけではなく正課外教育の重要性について、次のように記載されている。

大学教育には、大別すると正課教育と正課外教育があり、正課外教育とは学生が自主的に行う課外活動、クラブ・サークル活動やボランティア活動などをいう。
[……] 2000年の「大学における学生生活の充実方策について(報告)——学生の立場に立った大学づくりをめざして——」(大学における学生生活の充実に関する調査研究会)において、「正課教育や正課外教育の中で、学生に社会との接点を持つ機会を多く与えたり、また、学生の自主的な活動を支援するなど、各大学

がそれぞれの理念や教育目標を踏まえ、個性化や多様化を進める中で適切に取り 組んでいくことが期待される」とされ、正課教育を補完するものとして考えられ てきた正課外教育の意義が大きく捉え直された。さらに、2008年の「学士課程教 育の構築に向けて(答申)」(中央教育審議会)においても「学士課程教育を通じ て到達すべき学習成果は、[……]、課外活動を含め、あらゆる教育活動の中で、 修業年限全体を通じて培うものである」とされ、正課外教育の重要性がうたわれ ている。

また、同『大学時報』において、立教大学文学部の逸見敏郎教授は、「正課外教育のもつ教育力」というテーマで次のとおり述べている。

正課外教育は、SPS(Student Personnel Service:厚生補導・学生助育)の理念に基づく、学生の成長発達支援を指すものとして理解することができる。文部省大学学術局学生課(1953)によると、学生助育の理念は「学生を各種の人間的欲求を持って生活し成長する主体であると見なす観点に立ち、その発達と成熟を助長し援助する一切の活動」であり、また「広義の教育活動の一環であり、あるいは教育そのもの」と位置付けている。

# 【参考資料】

- 1. 『関西学生会館懇談会研究集会報告書』(第一輯) 第1回1963(昭和38)年12月19日~第14回1971(昭和46)年1月13日
- 2. 『関西学生会館懇談会研究集会報告書』(第二輯) 第 15 回 1971(昭和 46)年 6 月 24 日~第 28 回 1978(昭和 53)年 1 月 27 日
- 3. 「学生会館建築委員会」(第1回~第16回)
- 4. 「部長会議と学館建設委員会との合同会議」(第1回~第3回)
- 5. 「西南会館交渉委員会」(第1回~第7回)
- 6.『西南スポーツ』〔1962(昭和 37)年 12 月 15 日発行〕
- 7. 『西南学院百年史』 [西南学院百年史編纂委員会、2019年]
- 8. 『大学時報』 [日本私立大学連盟、2015(平成27)年9月]

# 百道浜校地移転 20 年 ~変わったこと、変わらないこと~

西 輝久

#### 1. はじめに

西南学院中学校・高等学校が現在の百道浜校地に移転したのが2003年4月、2023年現在でちょうど20年を迎えた。中高にとってこの百道浜校地移転は非常に大きな転機になったと言えるだろう。この20年を端的に言い表すのはある意味では容易なことと思う。それは一貫教育を現実的に進めてきた時間であり、「中高一貫教育の深化」と表現することにあまり異論はないのではないかと思われるからである。

本校は中高一貫校として既にこの福岡の地で十分に認知されているが、一貫教育が始まったのは移転の6年前、1996年である。それまで長きに亘って「西南学院中学校」と「西南学院高等学校」として、別々の道を歩んできた2つの学校が1つの学校になったのであるから、「西南学院中学校・高等学校」が全く新しく設立されたのとは事情がまるで違う。まず、一貫教育が実現するまでの中高の足跡を簡単に辿ることから始めたい。

# 2. 校地移転までの中高一貫の歩み

1916年に開校した旧制西南学院中学部は、第二次大戦後、1947年に6・3・3制が始まったことに伴い、その年の4月から新制の中学校、また翌1948年4月から新制の高等学校という、制度上2つの学校に分かれた。中学校では同年に仮の新校舎を建築、またスタッフもほとんど中高別というように、物理的、心理的に「別の学校」に分離していく。1951年から数年間、一貫教育実現の動きがあり、ほんの短い期間、形としての一貫教育が行われたが、一度別の学校となってそれぞれの状況や立場が変化し、教育の方針にも差異が生じる中で、中高の間で感情の対立が起こってしまい、そのためにすぐに破綻してしまった。(『西南学院百年史』通史編総論第4章第2節6「中学校・高等学校の一貫教育の試みと挫折」)

1970 年代から中高教員組合を中心に一貫教育についての議論が交わされ、中高分離から実に約50年の年月を経て、1994年に高等学校が男女共学となり、96年に中学校も男女共学に移行、同時に「西南学院中学校・高等学校」として再び1つの学校となった。当時、1950年代の中高の感情的な対立は残ってはいなかったものの、「別の学校」の50年の間にそれぞれ独自の進化を遂げ発展してきたため、根幹は同じでも、それぞれの学校の持つ文化、雰囲気はどこか異なったものに醸成されていた。

1950年代の状況を知る教職員の中には数十年前に一度失敗している一貫教育が上手く進んでいくかどうかという危惧があったようで、一貫教育を実現するためには本当に多くの苦心があったようである。

一貫教育実現の前年度、1995年から組織された「中高一貫推進委員会」の働きによって、中高共通の制度や内規が次第に整えられていった。一貫の一期生が高校に入学する1999年度から中高の校長が1人になり(真鍋良則校長)、教員の人事交流も始まって、そこから現実的に一つの学校として機能し始めた。

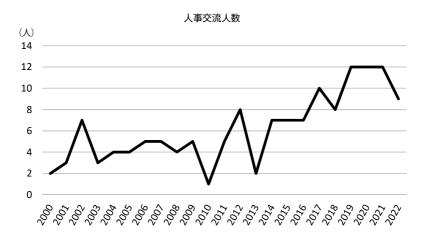
但し、百道浜校地移転までの6年間は、従前どおりチャペル(現在の大学博物館)を中高で共用するのみであった。勿論礼拝は別々の時間設定であったし、中高生が一堂に会する機会はなかった。敷地が一つながりであるのみで、教職員の人事交流も限定的であった。「全体職員会議」という名目で年に数回、全員での会議が持たれていたが、中高別々の学校であった時間がとても長かったので、それまでのそれぞれの行事や会議の持ち方、時制、時間割の作り方、また教職員間の勤務時間の意識の違い(勤務時間は決められていたが、有名無実であった)、など教職員間の様々な「常識」の乖離は当然存在した。

1993年の臨時理事会で中高の百道浜校地への移転が公表されていたものの、教職員間では日々の目の前の生徒への対応が職務の中心であり、意識は低かったように思う。2000年頃になって、移転が具体化されてきたころから、少しずつ移転が現実のものとなるという意識とともに中高の一体感も少しずつではあるが、醸成されていったように記憶している。「出るも地獄、残るも地獄」と移転をめぐる議論の中で当時の真鍋校長が答えたことをご自身で書き残しておられるが、(後に「出るは煉獄、残るは地獄」と訂正されている。)百道浜校地移転には様々な不安要素もあり、学校としての大きな決意が必要であったのは間違いのないことと思われる。期待と不安の入り混じる中で、中高それぞれの校舎では移転に向けて荷物の整理が進められていった。

# 3. 校地移転後の中高一貫の歩み~変わったこと~

西新校地での87年分の大切な思い出とそれに相応する膨大な荷物を携えて、2002年度中に百道浜への引っ越しが完了し、2003年4月にいよいよ新校舎での年度がスタートした。これ以降、加速度的に中高の一体感が増していったように感じる。移転後の歩みの中での一番大きな変化は、一つの学校としての一体感を構成員がはっきりと認識できるようになったことと言えるが、その一体感が一貫教育の深化を下支えしている。ここでは中高の一体感の醸成の証左となるであろう、具体的、現実的な変化について以下に少し項目を挙げながら辿っていきたい。

# (1) 人事交流



上の表は 2000 年度から 2022 年度までの中高の教員の入れ替わりの人数合計のグラフである。本校では、前年度の全体職員会議において、翌年度の所属を決定するのが慣例である。この表から分かるように、移転以前から中高の移動は少し行われていたが、移転後、年によって少ない場合もあるものの、漸増していると言える。近年はおおよそ 10 人前後の入れ替わりがあるのが通例である。言うまでもないが、中学から入学した生徒(一貫生)の高校入学に伴って数名の教員が中学から高校へ移動し、ほぼ同数の教員が高校から中学へ移動となる。このため今後これが大幅に増えることは考えられず、現況が維持されていくことと予想される。

2022年現在、就任後間もない教員を除き、中高のおよそ8割の専任教諭は所属の入

れ替わりを経験している。一部、担当教科等のため、移動が難しい場合もあるが、今後この割合は100%に近づくことが推測される。この中高の教員の移動が、中高の一体感の後ろ盾となっていると言うことができる。

# (2) 時 制

2021年、中高一貫教育実施25年目にして中高の始業時間が同一になった。

それまでは中学では8時15分に職員朝礼、その後教室で礼拝とホームルーム、8時50分から1限目が開始され、高校ではホームルームなしで7時50分から「0限目」の授業で1日が始まるという中高別の時代が長く続いたが、カリキュラムの変更に伴い、ほぼ中学校の時制に合わせる形で中高とも8時30分のホームルームからの始業となった。これにより初めて中高生が同時間帯に登校することとなり、教員も中高全体で朝礼を実施することとなった。一貫校としての大きな一歩である。

# (3) 組 織

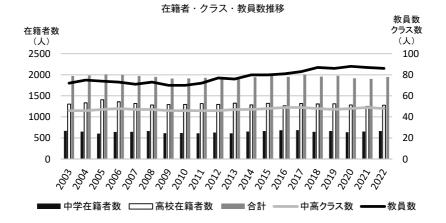
議決機関として中高それぞれに職員会議が置かれるが、「中学職員会議」が年間十数回、「高校職員会議」が年間 20 回程度開かれ、また年間 10 回程度「全体職員会議」が開催される。この仕組みは移転以降変化していないが、この 2~3年の間に、中高いずれかのみに関わることであっても、大切な事項については全体職員会議で審議する傾向が強くなってきている。このことも中高の一体意識を証明する一例となるだろう。

また、校務を円滑に進めるため分掌制がとられている。長い間、宗教部・教務部・ 進路指導部・生徒指導部・図書部の5つの部が置かれていたが、2014年度より広報部 が新設されることになった。また各部署の責任者である「部長」「主任」の置き方が移 転以降、多少変化している。この流れを見ても中高一体での指導が徐々に定着して いったことが分かる。

なお 2020 年度より中高で1名「副校長」が置かれている。(西南学院小学校設置準備に関連して 2009 年度に1年間だけ臨時的に副校長が置かれた。)

2003 年度	中高全体で部長5名、主任5名
2005 年度	中高それぞれに主任5名
2014 年度	中高それぞれに主任6名(広報部が置かれ、広報主任は中高兼務)
2017 年度	中高それぞれに主任6名(進路指導・図書・広報主任は中高兼務)
2020 年度	宗教部長・進路指導部長・図書部長・広報部長は中高兼務 宗教主任(中高兼務)・教務主任、生徒指導主任(中高それぞれ)

# (4) 在籍者数・クラス数・教員数



上の表は2003年度から2022年度までの本校中学生、高校生の在籍者数及びその合計と中高の合計のクラス数の合計、また教員(専任・常勤)の合計人数の推移を表したものである。

2014 年度から中学の定員が 200 人から 220 人に変更された。これは隣接する西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れに伴うものであった。クラスの数もその年度から年次進行で中学校は 5 クラスから 6 クラスに変更された(その受け入れのため前年度に中学棟西側に 4 階までの各フロアに 1 クラス分、教室を増設した)。但し、実際の中高合計のクラス数は様々な要因のため 2014 度以降もそれほど変化はない。また、在籍者数もほぼ変わらないことが分かる。

一方で、教員の数は 2010 年度あたりから少しずつ増えていることが分かる。近年、中高生を取り巻く環境も変化し、同時に教育に対して社会から求められる要素も以前に比較すると確実に多く、その分、担う役割も大きくなってきている。本校では以前から丁寧な生徒指導、また保護者対応を行ってきているが、近年、より濃やかにと求められるようになっている。このような中で教員は日々多忙を極めることになり、結果としてスタッフの数の増加につながっていると考えられる。

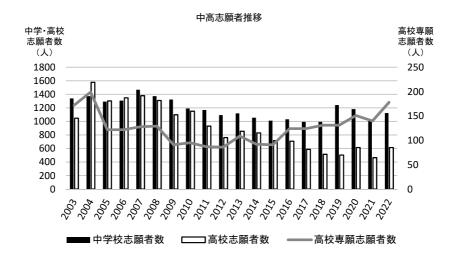
これは直接的には中高の一体感の醸成とは結びつかないが、このような状況の中、 例えば生徒指導時でも時に中高での情報交換が大きな鍵となる。そのような折には 1 つの学校としての力が発揮されることになる。

# (5) 西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れ

一体感とは別であるが、移転後の変化について以下に3点記すこととしたい。

前述のように 2014 年度、西南学院小学校からの推薦入学生の受け入れが開始された。その後、毎年 60 人程度本校に入学することになり、小中高で一貫性のある教育が可能となった。聖書の教えや西南学院の建学の精神、また校歌に 6 年間慣れ親しんだ生徒たちは中学校での学びを牽引する役割を担ってくれている。建学の精神を同じくする小学校から生徒を迎え、小中高の 12 年間を通して西南の校風に触れる機会を持たせることについては、小学校や中高のみならず、「キリストに忠実」である人格を育むという観点から、学院全体としても本当に喜ばしいことである。

# (6) 中高入試制度及び志願者数



中学校入試に関しては、2003 年度以降、入試制度そのものに変更はない。但し他校の共学化など、福岡地区の状況が若干変化している。上のグラフから、やや減少はあるものの、ほぼ横ばいで安定して受験生が与えられていることが分かる。

高等学校は、この 20 年間で入試制度にいくつかの変化が見られた。2003 年度は前後期制、前期に専願入試を含んでいた。翌 2004 年度、前後期制は変わらないが、前期に併せて後期でも専願入試を併せて実施した。その翌 2005 年度には前後期制と別日程で専願入試が独立して実施されるようになった。その後 2017 年度より、後期入試を廃止して、専願と前期のみの 2 回の入試に改めた。受験の機会は減ることになるが、

その分の教職員の力を在校生に注ぐべきであるという思いからの決断であった。

福岡地区の私立高校入試については、この20年間で他校の「生徒募集」への姿勢や動きが大きく変化し、例えば入試等の成績による「奨学金制度」の導入、また入試そのものが形骸化しているような状況もあると聞く。そのような状況下、本校は一貫した従来の姿勢を保ち続けていることもあり、受験生の減少傾向が認められる。特に前期入試の受験生についての検討は今後も必要になっているが、専願入試の志願者推移からは入学を希望する生徒が多いことが分かる。

# (7) 学習環境

西新校地に慣れ親しんだ者として、年月を重ねた校舎の醸す独特の風合いは今でも 時折ゆかしく思い起こされる。そのような折には、移転後の現在、西新駅から少し遠 くなってしまったものの、快適さや便利さは以前と比較にならないほど整った環境が 与えられている現況に、ふと不思議な感覚を覚える。

移転後の大きな改装は前述の中学校校舎の増築のみであるが、2014 年 3 月に体育館(アリーナ  $I \cdot II$ )に空調機器が整えられたことを記しておきたい。近年の温暖化により深刻度を増した熱中症対策のためである。

2017 年から年次進行で各教室の黒板上部にロール型スクリーンが取り付けられ始め、移動式のプロジェクターを用いての ICT 機器を活用した授業が可能になった。その後、2019 年の春には中高全教室に教室前方天井部固定のプロジェクターが配備され、本校の ICT 環境が整うことになった。

その 2019 年度末からの新型コロナウイルス感染症拡大のために、今なお学校現場は全国的に甚だしく影響を受け続けていることは改めて言うまでもないが、本校でもそれを契機としてもう一つ生徒の学習環境に大きな変化が生じた。生徒も教員も各々1台の情報端末(iPad)を持つようになったことである。本校ではコロナ以前から既にiPad 導入を企図しており、2020 年 2 月には教員に1台ずつ端末が配られ、その後に生徒端末の計画もあった。故に「感染拡大のために」と表現すると正確さを欠くことになるが、いずれにしても 2020 年度は約 2 か月間の休校から始まる異例の状況で、その年度中には中学生全員に生徒用端末が準備され、2021 年当初には高 3 を除き全学年が端末を持つことになったことを考えると、感染拡大が皮肉にも大きな推進力になったことは事実である。2022 年度末までには全校生徒が接続可能な校内 Wi-Fi が完備される予定である。この一連の ICT 機器の整備により、生徒の学習ツールは大きく変化することになった。



西南学院中学校・高等学校の正門

#### 4. 校地移転後の中高一貫の歩み~変わらないこと~

学校教育は時代の流れに合わせて、その手段や方法など、表層的な部分を変化させていく。以上触れてきたように、本校もその例外ではないが、ここではこの 20 年間の歩みの中でも、ほとんど変化のなかった 3 点について触れる。

中学生と高校生とでは発達段階にも大きな差異があり、また置かれる状況も異なるため、学校行事にも違いがあるのは当然である。中高合同での行事は現在のところ、4月の合同始業式対面式、創立記念式典のみである。中高の行事の内容としては、以前から各々大切にしてきたものを、現在も継続して実施している。それは、中学校では最大の学校行事という位置づけの体育祭、合唱発表会、また平和教育の集大成としての沖縄修学旅行であり、高校では文化祭、スポーツフェスティバル、林間学校である。これらは、小変更はあっても基本路線はほぼ変わっていない。

一貫校の場合、中高で全く同じか、一部のみに差異があることが多い制服についても、本校の場合、移転後もそれぞれ異なったスタイルを踏襲しており、基本的な変更はない。ただ、ジェンダーレスの観点から、ジャケットスタイルの高校では2020年度よりスカートやパンツなど、制服の選択に大きく幅を持たせている。一方中学校では男女共学化以来、「女子用」としてセーラー服にオーバージャケットというスタイルを採用しているため、アイテム選択では解決できず、デザイン等を含めて現在検討を継続している。

部活動についても、運動部・文化部(同好会を含む)合わせて、中学校で 23〜25 程

度、高校で40程度の部が活動しており、移転後ほとんど変化はない。ただ入部率が 近年少し低下傾向にあることは全国的な傾向ともなっている。

さて、100年以上の長い歴史を持つ本校には、長きに亘って堅持してきた揺るぎない建学の精神が据えられており、その精神に立つ教育の実践を追求する姿勢に変化がないことは言うまでもない。また連綿と受け継がれてきた自由な校風は、移転しても、またその後20年経過しても、変わらず次の世代に受け渡されていっている。本校の教育の根幹部分は変化するべくもない。

#### 5. おわりに

元々別の学校として、それぞれ独特の文化を持ち雰囲気を纏ってきた西南学院中学校と西南学院高等学校が、新しい場所で1つの学び舎に置かれることを経て、建学の精神を同じくするだけでなく、一体感を伴った1つの学校となっていく過程を目の当たりにしてきた。

当然のことであるが、この一体感の醸成にはその根幹に神様の存在、また「キリストに忠実なれ」という創立者ドージャー先生の祈りがある。そしてその意志を受け継いできた教職員の思い、「目の前にいる子どものために」という、教職員に共通した熱く固い思いがある。加えて6年間に亘って生徒の成長を見守ることができる喜び、その喜びを共有するところから生まれる連帯感があるのだと思う。この場に共にあるという喜び、一体感が本校の根底にはあって、それが今の姿、一貫教育の深化を支えていることに疑う余地はない。

# 西南学院グリークラブの百年

河野 正海

2019 (令和元) 年9月、西南学院グリークラブは創立百周年の記念すべき大きな節 目を迎えた。私達はこの百周年をより意義あらしめるために、「百周年記念事業 | とし て以下のような行事を行った。

1. グリークラブ百年の歩み展

9/2~10/19 百年館企画展示室

2. グリークラブ創立百周年記念式典

9/21 大学チャペル

- 3. グリークラブフェスティバル演奏会 9/22 アクロス福岡シンフォニーホール
- 4. グリークラブ創立百周年記念レセプション 9/22 西日本新聞会館
- 5. グリークラブ創立百周年記念誌「百年の歩み」発刊 2022(令和4)年10月

そこで記念誌「百年の歩み」の概要や、西南学院の歴史の中でグリークラブが辿っ てきた歩みを記述してみたい。



2019年9月22日アクロス福岡で行われたグリークラブフェスティバル演奏会

#### 1. グリークラブの誕生

西南学院の創立から 3 年後の 1919(大正 8)年、本学に着任したアメリカ・南部バプテスト派宣教師 S.F.フルジュム $^1$ のもとに歌の好きな中学部の学生たちが集まり、チャペルサービスを目的として声楽の指導を仰いだ。その学生たちの中には、後に西南学院教授を務めた河野博範 $^2$ や伊藤俊男 $^3$ らが含まれていた。ミス・フルジュムがグリーの指導を始める以前にも、学院には何らかの形で合唱団は存在していたが、本格的にクラブ活動としての形を為したのはこれが最初であった。同時にこの新しいクラブの部長として活動を支えたのが、後に西南学院院長を務めた水町義夫 $^4$ であり、水町部長は出来立てのコーラスグループに「グリークラブ」の名称を与えた。創設時の西南学院グリークラブの組織体制は、後に西南学院院長を務めた G.W.ボールデン $^5$ を顧問に部長水町義夫、声楽指導ミス・フルジュムそして部員 10 人程でのスタートであった。

1921 (大正 10) 年 4 月の西南学院高等学部新設により、中学部のグリーのメンバーは殆どが高等学部へ進学したためグリークラブも高等学部へ引き継がれた。グリー創設メンバーの一人である井上精三<sup>6</sup>はグリーの中に「西南弦楽四重奏団」結成の行動を起こし、以降グリーの活動はストリングオーケストラ主体の音楽団体となった。翌年には正式に器楽部を設立したために、学友会音楽部に所属する「グリークラブ」の中に声楽部と器楽部の二つが同居した。この器楽部が後々「西南学院管弦楽団」結成の源流に繋がった。

1922 (大正 11) 年 10 月に福岡市記念館で開催された「西南学院グリー倶楽部秋季大演奏会」は、地方の音楽会としては大きな反響を呼び、九州各地から演奏旅行の招聘が相次いだ。このように大正時代のグリークラブはストリングオーケストラが主体の活動で、グリーが本格的に声楽部としての地位を確立したのは、1928 (昭和 3) 年のことである。

- 1 S.F.フルジュム (Sarah Frances Fulghum): アメリカ・南部バプテスト派宣教師、中学部で英語と音楽の教師、第4代舞鶴幼稚園園長。
- 2 河野博範:1926年高等学部神学科卒業、1931年高等学部文科卒業、西南学院大学 英文学科教授、第3代短期大学部長。
- 3 伊藤俊男:1925年高等学部文科卒業、中学校長、高等学校長を経て第10代西南学院院長。
- 4 水町義夫: 1912 年東京帝国大学文科卒業、当時は中学部長、西南学院高等学部教授を経て第4代西南学院院長。
- 5 G.W.ボールデン(George Washington Bouldin): アメリカ・南部バプテスト派宣 教師、西南学院高等学部神学科長を経て第3代西南学院院長。
- 6 井上精三:1925 年高等学部商科卒業、NHK 福岡放送局。

#### 2. 戦前のグリークラブ

1928 (昭和3) 年4月グリークラブは声楽部と器楽部を分離し、名実共に合唱団としての地位を確立した。10月には再興グリーとして4回目の演奏会を福岡で、12月には5回目の演奏会を久留米で開催した。折から満州事変が勃発、不安定な世情の中で1934 (昭和9) 年7月に第1回定期演奏会を開催。1941 (昭和16) 年には太平洋戦争が始まり、世の中は戦時一色となり音楽活動は極めて困難な情勢ではあったが、グリーは1943 (昭和18) 年まで9回の定期演奏会を継続して開催した。そしてこれが戦争只中における最後の演奏会となった。

#### 3. 生きて再び

学徒出陣等が決定した 1943 (昭和 18) 年7月、グリーは第9回の定期演奏会を西南学院講堂(現大学博物館)で開催した。戦時下のことで「空襲警報発令時の対応」等をプログラムに記しての開催であったが会場は満員の聴衆であふれた。ステージの大きな日の丸を背に演奏会は井上良助<sup>7</sup>の指揮で始まった。この演奏会のラストステージは、グノーの歌劇「ファウスト」の抜粋「兵士の合唱」であった。当時の『西南学院新聞』<sup>8</sup>に当日の模様が詳細に記されているが、『暫しの拍手鳴り止まず、追加された曲目チェコスロバキアの軍歌「戦線へ」には又も絶讃の拍手が送られ、斯くして十時近くに非常なる盛況裡に幕を閉じた。』とある。

この演奏会は卒業生にとっては最後であっても、グリーにとっても最後の演奏会となることを誰が予想したであろう。演奏会が終わると誰言うこともなく日頃練習していたピアノを囲み、あれこれと歌い出し最後に再び「兵士の合唱」を歌った。最後の演奏会のピアノ伴奏に急遽駆り出されたのが福永陽一郎<sup>9</sup>であったことも、後々のグリーにとって因縁めいた関わりであった。卒業生達は互いに手を取り合い、涙を流しながら、いつの日か再び「兵士の合唱」を歌いたいものだと語り合ったと言う。

この後は劇や音楽会等の上演は一切禁止され、グリーの活動はこの演奏会を最後に停止せざるを得なくなった。戦争が敗色濃厚になるにつれグリーからも部員が戦線へと召集され、再び帰ることの出来なかった部員も多く、御霊安らかなれと祈るばかりである。こうして戦況は益々苛酷となり我が国は1945(昭和20)年8月15日終戦を迎えた。

- 7 井上良助:1943年高等学部高等商業科卒業。
- 8 『西南学院新聞』: 第60号、1943年7月25日発行。
- 9 福永陽一郎:1944年中学部卒業、詳細は本文参照。

#### 4. 戦後のグリークラブ (再興期) - 石丸寛氏との出会い

学生たちも戦地から次々に戻り始めた 1945 (昭和 20) 年秋、グリークラブの部長をしていた藤井泰一郎<sup>10</sup>は、戦前グリーに所属していた石田昭<sup>11</sup>と松本信義<sup>12</sup>の 2 人にグリー再興の話を持ち掛けた。2 人は事の重大さに戸惑いながらも部員集めに奔走し、集まった 8 人と共に 10 月に再興グリーを立ち上げた。音楽の素養も無い新人たちは丸暗記で自分のパートの練習に励み、この年の暮のクリスマスコンサートで「権兵衛が種まく」「胸のただ中」の 2 曲を歌った。出来栄えなどは問題でなかった。厳しい練習に打ちひしがれながら再興 1 年目を終えたグリーに、翌 1946 (昭和 21) 年素晴らしい出会いが待っていた。それが石丸寛氏<sup>13</sup>との出会いである。

その頃石丸氏は両親の郷里の福岡に復員。美術を目指して福岡市に止宿し、「男声は西南 OB に限る」というグリー OB の松本省一<sup>14</sup>が主宰するライラック合唱団で歌っていたが、このことが奇しくも西南グリーの指導をするという縁となった。石丸氏との出会いはグリーに飛躍的な合唱技術の向上をもたらし、1947(昭和 22)年 3 月の第1回朝日合唱コンクールに優勝した。この時の自由曲は、石丸自身が採譜、編曲したロシア民謡「カチューシャ」であった。石丸氏は 1948(昭和 23)年までの 2 年間で、西南グリーに合唱の心技にわたる考え方や進むべき礎を築き上げた。正にグリー再興の恩人である。

アメリカ・南部バプテスト派宣教師 A.グレーヴス<sup>15</sup>の詞に石丸寛氏が作曲した学院のカレッジソング「Ah, Seinan!」と「She Wants Brave, Noble Men」が生まれたのは1951 (昭和 26)年。この頃からグリーは全日本合唱コンクールの常連校として注目されるようになり、中断していた定期演奏会の再開は1952 (昭和 27)年のことである。こうしてグリーは1959 (昭和 34)年8月、創立以来、初めて現役、OBが揃い、福

- 10 藤井泰一郎:1928 年高等学部文科卒業。1931 年西南学院中学部教員。その後、高等学部、専門学校、大学文商学部教授を経て第2代短期大学部長。
- 11 石田昭:1947年経済専門学校卒業。
- 12 松本信義:1948年経済専門学校卒業。
- 13 石丸寛:文化学院大学部芸術科卒業。指揮者、画家。福岡の合唱界育成に貢献。 九州交響楽団結成、上京後指揮者として活躍、黛敏郎等と「題名のない音楽会」を立 ち上げた。特に「5000 人の第九」は有名。
- 14 松本省一:1941 年高等学部高等商業科卒業。九州アマチュア合唱団のリーダー的 存在。
- 15 A.グレーヴス (Alma O' Norean Graves): アメリカ・南部バプテスト派宣教師、1938 年高等学部教授。戦後 1947 年に復職、在任中は E.S.S. の学生にシェイクスピア劇 (英語劇) を指導、1968 年勲四等瑞宝章を受章。

永陽一郎を客演指揮者に迎え、「創立 40 周年記念演奏会」を電気ホールで開催した。 当時のグリークラブの年間活動は、春の他大学合唱団との交歓演奏会、夏は西日本各 地への演奏旅行と定期演奏会、秋は合唱コンクール、冬はクリスマスコンサートと極 めて多忙で、日曜日だけが休みという極めてハードな体育会系のクラブにも負けない 練習量の合唱団であった。

#### 5. 合唱音楽の高みを目指して

1947 (昭和 22) 年以来、参加してきた合唱コンクールは、全国制覇は出来なかったが 1968 (昭和 43) 年までに都合 23 回出場、3 位内入賞は 8 回を数え「九州に西南あり」との高い評価を得ていた。しかし従来踏襲してきた年間スケジュールとメンバーの育成、そして何よりも定期演奏会の質の向上を図るためには、秋の 2ヵ月をコンクールのためだけに割くことの不合理が問題となり、1970 (昭和 45) 年合唱コンクール参加を取り止めることになった。

同様の動きは関東、関西の他大学グリーにおいても見られた。年間活動の集大成としての定期演奏会に、より一層完成度の高い音楽性を求めるために、西南グリーは中央から専門家の指揮者を招聘する道を選んだ。創立50周年記念演奏会から、80周年までの31年間にグリーが中央に求めた指揮者は6人で、この6人の指揮者による定期演奏会は実に28回に及んだ。特に福永陽一郎は19回、福永亡き後は関谷晋氏16に8回の指揮を務めていただき、より高度で充実した定期演奏会の維持にメンバーは努力を傾注した。

当時西南グリーは合唱界において、全国大学グリーの中でもトップ5に入るとの高い評価を得ていた時期である。この時期、国内の有力大学グリーは海外演奏旅行を開始、合唱熱の高まりと共にメンバー数も 100~120 人と大型化していった。

## 6. グリークラブの海外演奏旅行

西南グリーの海外演奏旅行は 1965 (昭和 40) 年 8 月の未だ米軍管理下にあった「沖縄戦跡慰問演奏旅行」に始まる。台風の余波の残る鹿児島港から船での沖縄遠征であった。そして 1975 (昭 50) 年 2 月の第 1 回アメリカ演奏旅行以降、アメリカにはおよそ 3 年おきに 6 度の遠征を実現した。その間を縫って 1983 (昭和 58) 年 7 月には韓

<sup>16</sup> 関谷晋:1951 年早稲田大学政経学部卒業。在学中に早稲田大学コールフリューゲル合唱団を設立。指揮者。

国、1985(昭和60)年7月には福永陽一郎引率のもと、早稲田大学グリークラブと共に「第7回ヨーロッパカンターターへの参加を果たした。

春休みや夏休みの西日本一円の演奏旅行とは異なり、海外演奏旅行ともなれば演奏そのものは元より、メンバーの財政的な負担も大きく、都度グリー OB のみならず学院、大学、同窓会等を含め広範な支援が必要であった。幸いにも本学のアメリカにおける幅広い交流大学の協力や、海外同窓会支部、帰米された元本学の先生方のご助力をいただき、微力ながらも国際交流への貢献を果たし得たことは、グリーとして誇るべき活動であったと言えよう。

#### 7. 福永陽一郎と西南グリー

福永陽一郎は戦前、西南学院中等部及び高等学部に在籍。ピアノに長けていた所から1942 (昭和17) 年7月グリーの第8回、及び1943 (昭和18) 年7月の戦時体制下最後の第9回定期演奏会にピアノ伴奏者として出演している。また、同氏のご母堂福永津義氏17は1944 (昭和19) 年に開設された福岡保育専攻学校(現在の大学人間科学部児童教育学科)の初代校長を務め、永らく西南学院に奉職された。

福永陽一郎は、1948 (昭和23) 年東京音 楽大学 (現・東京芸大) ピアノ科に学びな がら、東宝交響楽団 (現・東京交響楽団)



晩年の福永陽一郎

で近衛秀麿に指揮法や作曲法を学んだ。1950 (昭和 25) 年故あって帰福、西南学院大学神学部に編入と同時にグリークラブに入部した。1 年程の在籍の後、1951 (昭和 26) 年再上京し、後に「藤原歌劇団常任指揮者」を務めた。1953 (昭和 28) 年には畑中良輔氏<sup>18</sup>とプロ男声合唱団「東京コラリアーズ」を設立し、この頃「グリークラブアルバム」3 部作を編纂するなどして合唱界の隆盛の基礎を作った。

<sup>17</sup> 福永津義:初代早緑子供の園園長、第8代舞鶴幼稚園園長、初代福岡保育専攻学校校長。

<sup>18</sup> 畑中良輔:1943年東京音楽学校声楽科卒業。声楽科、音楽教育者、音楽評論家、指揮者、日本芸術院会員。北九州市門司区出身。

合唱指導者としての福永と西南グリーとの本格的な関わりは、1959 (昭和34)年のグリークラブ創立40周年記念演奏会の指揮であった。その5年後の1964 (昭和39)年の第13回定期演奏会から、創立70周年記念の第38回定期演奏会までの25年間に、実に22回もの客演指揮者を務めた。

西南学院創立 70 周年に当たっての記念行事は、1986(昭和 61)年 5 月 9 日から 10 日にかけて行われた。9 日の記念式典は福岡国際センターで、2 日目は福岡サンパレスにおいて記念音楽会が行われた。第 1 部はグリークラブや管弦楽団をはじめとして、大学の音楽系各部による演奏会。グリーは学院の記念すべきこの日のために「キリストの最後の7つの言葉」を福永の指揮で演奏した。第 2 部は午後 6 時半より、管弦楽団 OB・OG オーケストラと、特別編成の教職員・学生及び OB・OG など 200 人から成る混声合唱団によりヘンデルの「ハレルヤ」の大合唱を行った。指揮は福永陽一郎が務めた。

福永にとっては、前年の1985 (昭和60) 年7月は西南グリーを率いて3週間にわたりヨーロッパカンタータへの参加。1986 (昭和61) 年は5月の西南学院創立70周年記念音楽会や12月のグリー定期演奏会、そして翌1987 (昭和62) 年12月のグリー定期演奏会と、この3年間は西南学院と西南グリーに寄り添った期間であった。

福永陽一郎は、石丸寛氏と共に西南学院グリークラブの顧問でもあったが、実質的には常任指揮者であったと言えよう。「少年時代を過ごした福岡に来て西南グリーを指導することは、単に合唱専門家としての立場よりも、懐かしい福岡に帰る、西南学院に帰るという一種帰郷に似た気持ちでもあった」と氏は述べている。その気持ちが厳しい指導の中にも学生達との暖かい心の交流を生み、メンバー達から絶対の信頼を得、慕われた要因であろう。

1990(平成2)年2月、63歳の若さで逝去。死の前年12月の「グリークラブ創立70周年記念第38回定期演奏会」が、福永陽一郎の全ての音楽人生における最後の指揮舞台となったことも、西南との深い縁がもたらしたものと信じたい。

### 8. 福永陽一郎の音楽遺産

福永は生前家族に対して、「自分に万一のことがあった時には、音楽に関する資料類は全て西南学院に寄贈して欲しい」と伝えていたという。そして逝去後、福永の書斎がそのまま移されたかの如く、膨大な書籍や楽譜類が西南に寄贈された。このことは当時ニュースとして全国的に伝えられた。現在、寄贈されたこれらの遺産はグリークラブ OB 会によって整理途中であるが、福永が長年携わってきたオペラ関係の書籍

類や、ライフワークとして力を注いでいた、黒人霊歌に関する楽譜等は特に貴重である。またオーケストラや合唱指揮に用いた、福永直筆の朱書きの注記が入った多くの楽譜も興味深い。これらは福永陽一郎という音楽家を知るための一助にもなるであるう。

1950年代からの合唱隆盛の基礎を築いた「グリークラブアルバム」編纂に関しても、選曲段階におけるメモが残されているのは貴重である。何れにしてもこれらの資料を西南学院だけのものとはせず、出来る限り全国の合唱音楽愛好家と共有化したいと、グリークラブ OB 会ではその方法を模索し、リスト化やデジタル化を図るべく作業を急いでいる。

#### 9. 西南グリーよ、永遠なれ

グリーの OB は 1,200 人を超えるが、卒業後も各地の合唱団で歌い、かつ指導者として活躍、地域の合唱活動を支えている。 OB 合唱団「西南シャントゥール」は結成から 69 年の歴史を有し、1984 (昭和 59) 年から今日まで毎年欠かさず定期演奏会を開催している。全国の一般合唱団で、このように絶えることなく定期演奏会を継続しているのは、極めて稀である。このシャントゥールの存在が、現役グリー成長の大きな牽引力となっていることも忘れてはならない。

2000 (平成 12) 年頃より全国的に大学合唱団における合唱離れの動きが起きた。社会の変化や価値観の多様化、趣味や娯楽の幅も拡がるともに、音楽そのものもジャンルの多様化等諸々の理由は考えられるが、学生たちの意識の中に組織による拘束や上下関係を嫌う傾向が強くなったことは否めない。正規クラブ活動の部員数減少に比して同好会的サークルの加入者は飛躍的に増加傾向をみている。西南グリーにおいても毎年部員数の減少に歯止めがかからず、遂に 2006 (平成 18) 年部員数 0 となり 2 度目の休部の止む無きに至った。

本来グリーとは音楽的には「無伴奏の男声合唱」を指し、グリークラブとは無伴奏の男声四部合唱で、キリスト教系大学の合唱団として宗教曲を歌う事が条件とされていたという。西南学院グリークラブは、これらの条件を完全に具備した合唱団であり、単に愛好者による部活動に留まらず、西南学院にとっても欠くことの出来ない学内組織の一つであるともいえよう。

幸いにも西南グリーは 2008 (平成 20) 年 4 月再復活はしたが、2022 (令和 4) 年現在、スケール面でも技術面でも未だに再興途上の域を脱し得ない厳しい状況にある。西南グリーの 100 年を超える歴史と伝統を絶やすことなく未来へ向けて繋ぎ、西南学院にいつまでも讃美の歌声が響くことを願って止まない。

# 執筆者紹介(執筆順)

#### 今井 尚生(いまい・なおき)

2000 年 4 月より西南学院大学文学部国際文化学科助教授として着任し、2007 年に国際文化学部教授。宗教部長や宗教局長などを経て 2020 年 4 月から西 南学院院長に就任。2022 年 12 月からは西南学院大学学長を兼任。現在、西 南学院史資料センター長。

#### 古田 雅憲 (ふるた・まさのり)

2006 年 4 月に西南学院大学人間科学部児童教育学科教授として着任。その後、大学図書館長(2期)、児童教育学科主任などを経て、現在、大学図書館長(3期目)及び西南学院史資料センター運営委員。

#### 西 輝久 (にし・てるひさ)

1990 年 4 月より西南学院高等学校国語科教諭として着任。図書主任、広報主任を経て、2020 年 4 月より同副校長。現在、西南学院史資料センター運営委員。

#### 平良 晃洋 (たいら・あきひろ)

2019 年 4 月より西南学院小学校教諭。現在、西南学院史資料センター運営委員。

#### 森 万喜子(もり・まきこ)

2016年に舞鶴幼稚園に着任。現在、西南学院史資料センター運営委員。

#### 十田 珠紀(つちだ・たまき)

1986 年に保育士として早緑子供の園に着任。その後、主任保育士を経て 2019 年から副園長に就任。現在、西南学院史資料センター運営委員。

#### 金丸 英子(かなまる・えいこ)

2008 年 4 月より西南学院大学神学部准教授として着任し、2012 年に同教授。 学生主任や学科主任を経て神学部長、宗教部長などを歴任。現在は、西南学院大学大学院神学研究科長。2019 年 3 月まで、百年史編纂委員会委員長を務め、現在は、西南学院史資料センター運営委員、西南学院アーカイヴズ編集委員会委員長及びバプテスト資料保存・運営委員会委員長。

#### 安部 健一(あべ・けんいち)

1980年4月より西南学院高等学校国語科教諭として着任。2020年3月に定年退職し、2023年3月まで特別常勤講師。

#### 大杉 晋介(おおすぎ・しんすけ)

1981年4月より西南学院大学学生課に配属。その後、広報・連携課長、学院 本部事務部長などを経て、2017年4月より大学事務長。2020年3月定年退 職後、2023年3月まで学生課嘱託職員。

#### 河野 正海 (かわの・まさみ)

西南学院大学商学部商学科 1963 年卒業。在学中は、グリークラブに所属し、 トップテナーとして活躍。卒業後は、西南学院グリークラブ OB 会会長を経 て、現在、同 OB 会顧問。2011 年 11 月より西南学院大学学術文化会 OB・ OG 会連合会会長。

# 編集後記

- ◆本誌『西南学院アーカイヴズ』は、『西南学院史紀要』第12号が2017年で終刊した後、6年目にようやく後継刊行物として発刊された。これまで12年にわたり発行してきた同紀要は、『西南学院百年史』の刊行の準備のため、西南学院の建学の精神や歴史、先人たちの事蹟などを調査・研究することを目的としていた。『西南学院百年史』を無事に刊行したことによりその役割を終えたが、次の100年につなげるため、継続する刊行物が求められ、本誌の発刊に至った。
- ◆同紀要を受け継いだ『西南学院アーカイヴズ』の創刊号は、座談会を含めてそれぞれに意味のある有意義な内容であった。特に初代條院長の事蹟を調査した安部先生の原稿は、足で集めた資料や口述を基に執筆されている労作である。またわずか1枚しかなかった條猪之彦の写真に加え、調査の過程で新たな写真が入手できたのは貴重な発見であり、感謝申し上げたい。
- ◆『西南学院アーカイヴズ』は、今井院長の「巻頭言」にあるように、「学問的歴史研究だけでなく、口述に基づく記録を資料として含めることを是とし」つつ、「客観的根拠の薄い記述の学問的検証は今後の歴史研究に委ねられる」ことになるが、後の西南学院史研究の一助として、また建学の精神を受け継ぐ刊行物となれば本望である。本誌は、これまでの紀要の後継刊行物として、西南学院の歴史や事蹟を調査・研究しながら、将来歴史に残るだろうと思われる「今」も記録していくという視点をもって発刊していきたいと考えている。(世)